

「謝花民権」論についての一考察：特に沖縄の「日本復帰」に関して

大里，知子 / OSATO, Tomoko

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

619

(終了ページ / End Page)

698

(発行年 / Year)

1996-02-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002739>

「謝花民権」論についての一考察

― 特に沖縄の「日本復帰」に関して ―

大里 知子

一 問題の所在

本稿にてとりあげる謝花昇は沖縄史においてはあまりにも著名な人物であり、ここで改めて紹介する必要はないかも知れないが、念のためはじめに略歴を記しておきたい。

謝花は一八六五年（慶応元年）沖縄県島尻郡東平風村の農家の七人兄弟の長男として生まれた。（いわゆる「琉球処分」が断行されたのは、彼が十四歳の時である。）上杉茂憲県政の時に第一回県費留学生として太田朝敷・岸本賀昌等とともに東京に留学し、はじめ学習院において学び、のちに東京山林学校（後の帝国大学農科）を卒業して、一八九一年高等官県技師として沖縄に帰県した。その翌年、

元薩摩藩士の奈良原繁が沖縄県知事として赴任。謝花は杣山開墾問題、杣山処分問題で奈良原と対立し県庁を去った。その後、沖縄倶楽部を結成しその機関誌である『沖縄時論』を出版、また、上京して中央政界の有力者に県知事罷免の誓願行動を起こす一方、沖縄への参政権獲得運動を行なった。しかし、運動は挫折し、謝花は県外に職を求めて山口県に赴任することとなった。だが、赴任先に向かう途中神戸駅で発狂、その後は病氣治療の甲斐なく、一九〇八(明治四一)年四十三歳でこの世を去った。謝花による纏まった論稿としては、「讃岐国糖業実況及び其改良政策」(一八九一)「沖縄糖業論」(一八九六)「砂糖消費税法案に対する調査」「農工銀行と産業組合」(一九〇一)等が残されている。⁽¹⁾

この謝花らの運動は長年沖縄における自由民権運動の先駆的な運動と位置づけられ、沖縄の近代史をみる上で重要なポイントをなしてきた。しかしながらこのような評価は様々な問題を抱えているのも事実である。それらのうち何より根本的な問題の一つは、謝花らの運動をいわゆる自由民権運動として捉えることが妥当なのかという点にあると思われる。

そもそもこのような評価は、謝花昇を「義人」として紹介した親泊(大里)康永⁽²⁾が描いた謝花像に端を発し、次第に定説化していったと考えられる。そこで描かれる謝花らの運動とは、東京留学中に自由民権運動の「洗礼」(思想的影響)を受けた謝花が、郷土沖縄に帰った後、圧政者奈良原の施

政に憤慨し、ついに立ち上がったというものである。しかし、明治十年代にいわゆる本土で展開された自由民権運動を、「国会開設」「地租軽減」「条約改正」を要求し、自らの国家構想を持った上で絶対主義国家と対決しようとしたブルジョア革命ないし近代民主主義的革命運動であったと捉えらるゝとするならば、⁽³⁾ 謝花らの運動を自由民権運動と規定し、それが単に時間差をもって沖縄において展開されたとみることはできない。⁽⁴⁾ つまり、沖縄に選挙権が与えられていなかった以上、謝花らの運動が参政権獲得運動であったことは確かだが、彼らの主目的は奈良原の圧政からの脱却にあり、明確な国家構想意識を伴ってすすめられたとは考えられないからである。

筆者は謝花らの運動について別の視点から捉え直したいと考えているが、それについては後述するとして、ここでは以上のような問題をふまえて、従来「謝花昇の自由民権運動」と記述されてきた事柄について「謝花民権」という用語を用いて論じていくことを明記しておきたい。⁽⁵⁾

本稿が目的とするものは、謝花昇らの運動そのものについて実証的に再検討を加えるというのではない。約言すれば、これまでの謝花民権論の整理ということなのだが、かといって主な先行研究を一つ一つとりあげて検討しようというのではない。M・ヴェーバーが「何が研究の対象となるのか。またこの研究がはてしなくつづく因果連関のなかへどこまでさかのぼってゆくかということを決定するのは、研究者とかれの時代とを支配する価値理念なのである。」⁽⁶⁾ といい、また、E・H・カーが「歴

史家は彼自身の時代の人間なのであって、人間存在というものの条件によってその時代に縛りつけられている」⁽⁷⁾と指摘しているように、個々の研究者が描きだす歴史叙述にその時代の思想状況が何らかのかたちで反映している以上、研究史の整理は、時代の思想状況の流れをくみ取ることを可能にする側面を持つものと思われる。

特に沖縄の場合、「世替り」という固有の歴史的経験を経ており、そのような歴史のなかで謝花民権がどのように論じられてきたかということに着目することは、以下の二つの点で意義があると思われる。

まず一つは、基礎史料の絶対的不足ということに起因する。言うまでもなく、沖縄戦による被害は勿論のこと、「琉球処分」、米軍統治と、沖縄が歩んできた歴史の故に歴史史料の多くが失われた。⁽⁸⁾ 謝花民権に関して言えば、謝花本人に関する史料はほとんど発見されていないのが現状である。従ってこれまでの謝花研究は、残されたわずかな史料をどう読み込み、解釈するか、というところからそれぞれの研究者の謝花像が構築されてきた。⁽⁹⁾ この点に、謝花研究が議論先行型で実証性が低く、ともするとイデオロギー過剰な政治意識が反映されやすいものになってしまいがちな一つの原因があった。このことを逆からみれば、議論先行型であったればこそ、そこに投影された思想状況を整理する意味があると考えられるのである。

二つ目は、これもまた沖縄近代史研究全般にあてはまることだと思われるが、謝花研究が戦後の米

軍支配という状況下において、日本への「復帰」という政治課題（いわゆる「沖縄問題」）と絡んで、極めて政治的な文脈において研究されてきたということである。とりわけ謝花昇は、大江健三郎が「謝花昇という人間のイメージそのものが、いわゆる祖国復帰運動のなかで強く生きいきした光をあたえられ、その光が、逆に照りかえして、いちいちの時期の復帰運動に、くっきりとした輪郭と影をえがいてきたのである。」⁽⁹⁾と述べているように、善かれ悪しかれ「復帰」のシンボリック存在として取り上げられた。それ故に「謝花がどう描かれてきたのか」ということをみることは、沖縄の戦後史の流れの一側面を映しだすのに適していると思われる。

本稿は以上のような問題意識に拠って、単に新たな謝花研究を進める上での前段階として先行研究の問題点を指摘するということにとどまらず、主に「日本復帰」という戦後沖縄の一大テーマを抱えたなかで「謝花民権」がどのように論じられてきたかということを通じて、当時の沖縄の思想像の一側面を明かにしようというものである。

(1) 参照、謝花民権関係文献一覧

(2) 親泊康永が一九四四（昭和一九）年大里に改姓した関係上、一九三五年に出版された『義人謝花昇伝』の著者名は親泊康永、戦後刊行された改訂版『沖縄の自由民権運動―先駆者謝花昇の思想と行動』（一九六九）は大里康永著となっている。

(3) 後藤靖「自由民権論」『国史大辞典』P三〇一

しかしながら、松尾章一のように「戦後学界の主流を占めてきた自由民権運動をブルジョア民主主義革命とする見解は、実証的・理論的の両面からあらためて再検討がなさるべき時期にきている」として、自由民権運動をわが国最初のブルジョア民主主義革命運動と規定する見解を基本的には支持しつつも、思想的、社会経済史的にみた場合の、このような規定についての限界を指摘する見解もある。(松尾章一『増補・改訂 自由民権思想の研究』(一九九〇) 日本経済評論社 P三)

(4) 安良城盛昭・高良倉吉「沖繩と歴史研究―転換期の課題を語る」『沖繩思潮』9・10合併号(一九七七年八月)―安良城盛昭『新・沖繩史論』(一九八〇) 沖繩タイムス社 所収

(5) この用語は、筆者による造語ではなく、これまでも幾度か使われてきたものである。おそらく我部政男によって造られたものだと思うが、我部は、「自由民権運動が、明治十年代の日本人民の権利と自由を求めた日本最初のブルジョア民主主義革命であるとする立場からすれば、たとえ両者の運動の内容において種々の類似性や共通性を見出しうるとしても、後者の時期を二十年も遅らせて三十年代まで延長することに疑問を持つ人も少なくないであろう。この点を考慮して、時には、謝花昇らの運動をそれと区別するためにカッコでくって沖繩の「自由民権運動」という表現によって独自の意味を附している。(中略)ともあれここでは、二十年間の時期的なずれのあることを前提としつつ、通説にしたがい、謝花昇らの運動を沖繩の自由民権運動と称することにし、それを特に、謝花昇の名にちなんで謝花民権と呼ぶことにしよう。」としている。―『岩波講座 日本歴史』16巻月報14(一九七六/六)『近代日本と沖繩』P六六(一九八一)三一書房 所収

(6) M・ヴェーバー著 出口勇蔵訳「社会科学および社会政策の認識の『客観性』」『政治・社会論集』P八五(一九八八) 河出書房新社 所収

(7) E・Hカー著 清水幾太郎訳『歴史とは何か』P三一(一九六二) 岩波新書

(8) 田里修「戦災実態調査と字誌」『岩波講座日本通史』別巻二 P三八七(一九九四) 岩波書店

(9) 伊佐眞一「謝花昇の新史料〈中〉」『琉球新報』（一九九〇・一二・五）

(10) 大江健三郎「謝花昇と沖繩」『思想史を歩く 上』P二六（一九七四）朝日選書

二 米軍支配のなかで

前章で示した問題意識に拠って、謝花昇という人物及び彼らの運動がどのように描かれてきたか、「日本復帰」の際の謝花民権を巡る論争に至るまでの謝花論の流れについて概観してみたい。

1 義人謝花昇伝

謝花昇は死後しばらくの間、農民出身でありながら沖繩初の学士になり高級官僚になったということについては称賛されながらも、「おかみ」にたてついた者として、また「ガクブリ」（勉強し過ぎると頭がおかしくなる）の例として一般的にあまり良いイメージでは見られていなかったという。⁽¹⁾

そのような謝花を「義人」として大きく取り上げたのは、昭和初期に東京深川でセツルメント活動をしていた沖繩出身の親泊（大里）康永だった。親泊は沖繩出身の労働者から謝花昇のことを聞き、⁽²⁾埋もれた義人謝花昇を顕彰することで疲弊した沖繩社会に活力を与えようと、沖繩の救済・解放を目的とした社会運動の一環として謝花研究に取り組んだ。⁽³⁾

その後も、謝花民権についての通説となっていた親泊（大里）の謝花伝⁽⁴⁾のポイントは次のような点である。まず、謝花は「働く農民の子」「百姓の子」として生まれ、生涯その立場を貫いた。そして、その才能を見込まれて東京に留学生として派遣された謝花は、在京中に中江兆民の思想的感化を受け、帰郷後、奈良原繁県知事の圧政に抗して下野し、沖縄県における自由民権運動の先駆者として参政権獲得運動を行なっていく。しかし、沖縄のために立ち上がった謝花も最後には、奈良原の弾圧、旧特権階級の妨害などから狂死してしまう、というものである。

この時出版された『義人謝花昇伝』⁽⁵⁾は、言論及び思想統制の厳しい時代状況、⁽⁶⁾また当時の謝花のイメージが影響したためか、さほどの評判を呼ばなかった。しかし、戦後の米軍統治、異民族支配という状況のなかで、謝花の民権運動家、権力に対する抵抗者としての側面がクローズアップされ、大きくとりあげられることになったものと思われる。⁽⁷⁾

2 米軍統治と謝花

一九四五年四月、沖縄本島へ上陸した米軍は「米海軍軍政府布告第一号」を発し、軍政府を設立した。これ以後、事実上米軍による沖縄支配が開始された。

米軍統治下における謝花民権像をみようとする場合、「琉球列島米国民政府が、”宣撫工作”のため刊行していた広報誌」⁽⁸⁾である、『守礼の光』『今日の琉球』につきあたる。在沖縄米軍の文化政

策の一貫として、印刷物を通じての活発な広報活動が繰り広げられたが、中でも一般的な定期刊行物として米軍基地従業員をはじめ一般家庭へも配布された『守礼の光』と『今日の琉球』は、米軍統治下の「心理作戦」が展開されたメディアとして特に注目される。

これらの刊行物発刊の背景をみると、まず『守礼の光』は、ハワイの米太平洋陸軍司令部に所属し沖縄に指令本部をおいた第七心理作戦本部 (U.S. Army 7th Psychological Operations Group) が強い指導力を行使しており、編集作業についても、この作戦本部の厳しい監督下になされていたという。⁽⁹⁾ 一方『今日の琉球』は、琉球列島米国民政府渉外報道局発行の機関誌で、アメリカ政府の予算で刊行され無料で配布された。『守礼の光』がより一般的な読者層をねらったものであるのに対し、『今日の琉球』は、知識層向けの時事解説、評論誌としての性格が強い。⁽¹⁰⁾ 『今日の琉球』が発刊された時期は、米軍の軍用地政策に対して沖縄の住民側からの激しい抵抗運動（いわゆる島ぐるみ闘争）が盛り上がっていた時期であり、米軍が沖縄の統治政策、就中その教化政策になんらかの転換を迫られていた時期であった。したがって、アメリカ軍の価値意識の一方的な注入というスタイルではなく、少なくとも表面上は沖縄人の手による雑誌ということを強調し、沖縄固有の伝統文化に多くの紙面を充てることによって、日本からの意識の切り離しを図ろうとしたものとみられる。⁽¹¹⁾

以上のような性格をもつ『守礼の光』『今日の琉球』において、謝花民権はどのように描かれているだろうか。まず、『守礼の光』においては、仲泊良夫による「琉球偉人伝」という連載のなかで、

一九六四年三月から六月にかけ、四回にわたり「自由民権運動の指導者 謝花昇」として取り上げられている。内容そのものは〈親泊（大里）―謝花〉の記述の枠からほとんど出るものではないが、特徴的なことは、「琉球の歴史の中に、自由を守るために死んでいったふたりの偉大な人物がいる。」として、謝花と謝名親方鄭廻を並べて取り上げている点である。謝花は「十九世紀後半の沖縄で自由民権運動を指導し、推進したため、当時の官憲に迫害されて一九〇八年十月二十九日にわずか四十三才で悶死した」人物として、謝名親方は、島津入りの際、国王尚寧とともに薩摩に連行され、薩摩藩主に忠誠を尽くすという誓約書に署名調印することを拒んだことによって、一六一一年九月に処刑された人物というように記されている。¹²

この二人を「偉人」として並べて取り上げた理由は何か。そこには、どちらも薩摩藩ないし日本（政府）に対して、「沖縄人」「琉球人」の自由を得るために抵抗し、死んでいった人物という共通点を強調したい意図がうかがえる。沖泊はこの連載を「謝花の名は常に自由とともにあった。琉球の住民は、自由のために戦ったこの偉大な人物を永遠に忘れないであろう。」（傍点＝筆者）¹³と締めくくることがによって、謝花が日本（政府）から「琉球人」の「自由」を得るために闘った人物であるということ进行全面に押し出した。

沖泊が、謝花を描く際のタイトルを「自由民権運動の指導者」としながらも、「民権」をはずしてひたすら「自由」を得るための運動であったと強調したのは、沖縄人の「民権」が何ら保証されてい

なかった当時であって、「民権運動」という内容を『守礼の光』の誌上で大きく取り上げることが、米軍にとって不都合という程度の問題ではなく、米軍支配そのものの矛盾を曝け出し、不満を爆発させる起爆剤になりかねない可能性を考えれば、ぎりぎりの記述であったということだろうか。

さて、『今日の琉球』における「謝花民権」の取り扱われ方はどうだろうか。『今日の琉球』においては、川平朝申⁽⁴⁰⁾による「郷土の歩み―若い人々のための琉球歴史」という連載のなかで、謝花昇に関する記述がみられるが、「謝花昇」「沖縄の自由民権運動」という独立した項目としてではなく、「第二十三章 沖縄県政県知事奈良原繁」というなかで、主に日清戦争との絡みで取り上げられている。

ここでの特徴は、まず、奈良原繁が沖縄県政における功労者として高く評価されていることである。その例として、悪税制及び教育の改革、先島における行政改革⁽⁴¹⁾等に力を入れたこと、また、「日本人としての誇りを自覚させようと努め」、地方制度の確立のために、「中央政府から腕ききの役人達を集め沖縄県下の荒地の開墾事業を開始」したことなどが挙げられている。⁽⁴²⁾このように全体として、沖縄県政に情熱をもって取り組む奈良原の姿勢、県知事としての功績を称賛する内容になっている。

これに対し、謝花昇については、「奈良原知事の政策を、ことごとくに誹謗」した人物という評価がなされている。「奈良原は沖縄県知事としての功績は大きなものがありました。謝花の指摘する幾

多の失敗もありました。」⁽¹⁷⁾としつつも、奈良原が「林業専門の謝花技師の意見を無視し、尚順男爵と協力をして杣山の開墾を強行」した一方で、「出来るだけ謝花を納得させようと、開墾の必要性を」説いたにもかかわらず、それに対する謝花の態度は、「これを聞き入れるどころか断固として知事の計画を認めようとはしませんでした」⁽¹⁸⁾というように、知事を「誹謗」し、たて突いたという面が印象付けられる表現になっている。

また、謝花らの参政権運動等については全く触れられていない。謝花と奈良原の争いを、「奈良原の開墾計画や杣山処分、共有金問題、人事行政など謝花にとって総てが、氣にくわないことでした。」⁽¹⁹⁾というように県庁内での「内輪争」として矮小化して捉えることにより、謝花らの民権運動としての方向性を全く無視するかたちをとっている。⁽²⁰⁾このような謝花に対する評価は、「移民の父」と称される当山久三について、「沖縄人は海外勇飛すべきだ」と唱えて活躍したと大きく取り上げているのと対照的である。

要するにここでの謝花の取り上げられ方は、「お上にたてついた人物」ということが強調され、農村出身者として特権階級に対して抵抗した側面には触れても、参政権獲得運動を行ったという側面は外されているのである。当山久三のように、沖縄人が積極的にハワイなどへ「海外勇飛」していったということが、米軍に好都合な歴史的事実だったのに対し、謝花らの参政権運動のように「本土」（日本）に渡って実力者（政治家）と直接交渉したというような事実をあからさまにすることは、「本土」

と沖縄の関係をできるだけ断ちたい米軍にしてみれば、都合の悪い事実だったのだろう。

先述したような『今日の琉球』の性格上、沖縄の文化に関する記事にはある程度の紙面がさかれており、時として沖縄人のアイデンティティー・沖縄ナショナリズムの強調という形をとった。鹿野政直が指摘するように、謝花昇の銅像除幕式の模様を写真入りで大きく報道したことも、川平の「郷土の歩み」における謝花の記述も、その例に漏れるものではない。²⁰ 米軍の立場とすれば、どちらも沖縄ナショナリズムをある程度強調することで、日本と沖縄の切りはなしを狙ったものと考えられる。けれども「謝花昇」に関する記事を注意深く見ていったとき、その極力押さえ気味の記述が逆に権力に対する「抵抗者」としての謝花像を浮かび上がらせ、米軍の異民族支配に対する「抵抗」のシンボルとしての謝花民権のもつポテンシャルの大きさを感ぜさせる。こうして、日本に対抗する沖縄ナショナリズムの例として描かれた謝花は、著者もしくは編集者の意図を大きく超えて、米軍支配に対する「抵抗」のシンボルとして、更には「日本復帰」を勝ち取るための「本土との連帯」のシンボルとして機能する方向に進んでいくことになった。

3 「国民教育」と謝花

戦後、沖縄の帰属論議が最初に活発化したのは、一九五一年九月の対日講話会議に向けてである。

一九五一年四月には日本復帰促進期成会が結成され署名運動などを展開したが、結局、対日講話条約

においては北緯二十九度以南の沖縄。奄美などは米施政下におかれ、日本から切り離されることになった。これ以後、復帰運動は盛衰を繰り返しながら持続的に展開されたが、この復帰運動において沖縄の教職員が果たした役割の大きさはしばしば指摘されてきたことである。彼らは、日本に復帰することが民族本来の姿であるという前提のもと、「日本国民」教育を実践しつつ、復帰運動を主導していった。このような教育者を中心とした運動のなかで謝花民権は、求められるべき「国民教育」の明治期における一つの成果として取り上げられた。

ここでは復帰運動に携わった教育者の謝花論について、森田俊男²⁴を具体例としてとりあげるが、この検討に入る前に、当時の森田の、沖縄における戦後教育に対する考え方を押さえる必要があるかと思われる。

森田は、「沖縄の大人たち、教師と両親の心をくぐり努力にもかかわらず、沖縄の青少年に、いわば祖国喪失といい得る心の状況があらわれている」²⁵ことや、「本土の青少年たちに広く、沖縄と沖縄問題についての無関心の態度、日本の統一と独立といった民族的自尊心の意識の弱さがうまれている」ことに対して「深い危惧の念」を抱いた。²⁶この時点での森田は、教育によって沖縄の、そして「本土」の青少年に、「日本国民」としての自覚と誇りを育て、「国民意識」をゆさぶることで、「日本復帰運動」を実現させるための「連帯のたたかい」を成功させようという意図を持っていたのである。

る。四

そのような森田にとって謝花民権は、「本土」と沖縄の「連帯のたたかい」の可能性そのものであった。謝花らの運動は、それが「どんなに時間的に短く、弱いものであった」にしろ、「沖縄と本土の自由民権運動の、少なくとも思想の上でのつながりと具体的なたたかいの上での連帯の貴重な伝統」^四として取り上げるべきものとなったのである。

森田の謝花論の特徴としては、二つの点を指摘することができる。一つは教育の成果の強調であり、いま一つは「日本国民」「日本民族」の強調という点である。まず前者からみてみると、森田は謝花民権において見落としてはならないこととして次の二点を挙げている。まず一点目は、謝花昇や小学校教師当山久三などによる運動は、「開明派の上杉県令のつた自由主義教育（―それはわずかな期間ではあったが―）の育てたもの」であること。そして二点目は、当山久三や上間幸助など「教育行政における差別に憤りをもっていた小学校教師たちのなかから多くの指導者をだしてたたかわれた」運動であったということである。^四 森田は教育者という立場から、謝花らの運動が上杉県政時の「自由主義教育」の結果生まれてきたものであり、「教師たちの社会改革の要求に方向を与えるものとして起った」^四という点を強調することによって、当時の教育者たちの復帰運動におけるたたかいを鼓舞しようとしたものと思われる。

しかし、一旦視点を後者の問題、すなわち「日本国民」「日本民族」の強調という側面に転じると、

森田の謝花論に、当時の復帰運動の流れのなかで展開された「国民教育運動」に内在する問題点が如実に映しだされていることが窺える。それは例えば、日清戦争直前に沖縄の青年たちの間に生まれた「日本国民であるという自覚、愛国の感情」を高く評価したり、⁸⁰また、謝花が留学生として在京していた当時のエピソードとして、特に「上京直後の天皇拝謁（とくに沖縄留学生として天皇によばれたのである。沖縄の民衆にとってそれは非常な驚異であった）」⁸¹ということを取り上げたりしたことに端的に顕れている。

このような点を強調していった場合、結局、森田の言う「日本国民」としての自覚や、民族的自尊心ということが、戦前の「大日本帝国臣民」としての自覚とどう違うのか、一歩間違えると「天皇の赤子としての誇り」ということにすぐにすり変わってしまうのではないか、という点において、その言うところの「民族」という概念が鋭く批判されなければならなかった。もちろん森田の意図は、日本復帰運動に際しての「本土」と沖縄の連帯を生むための「日本の統一と独立といった民族的自尊心」を育む処にあり、それは「青少年を異民族の支配のもとで育てたくない」⁸²という極めて素朴な生活感情に応えるものだったと思われる。しかし、「本土」との連帯の必要性を強調するあまり、「日本国民」としての一体化や、「日本民族」としての自覚、自尊心というものを無批判に沖縄の青少年に教えていくというやり方は、佐藤政権が推進していた「本土」と沖縄の「心情的一体化」政策に取り込まれていく素地を作るのに貢献する結果となりかねないものであった。⁸³

後年森田は、「民族」ということに關して、全く逆の意見を述べるに至っている。「われわれは、一体化政策というものの底にある非科学的な民族観をきっぱりと批判し克服しなければならないのではないか。祖国復帰とか本土と沖縄の一体化というとき、国民の側にも、本土＝祖国という考え方はないだろうか。祖国に抱きとってもらいたい、とよくいう。そこにかすかでも祖国とは本土であり、本土政府であるという意識はないだろうか。いったい祖国とはなにか。」「愛すべき祖国なるものの内実は吟味されなければならない。」と。³⁴

このような「日本民族」に対する捉え方の百八十度の変化、そして復帰運動に内在するナショナリズムへの自己批判から、「祖国とは何か」という問いを発するに至った原因は何であろうか。

新崎盛暉の分析によれば、一九五〇年代後半の「国民意識昂揚のための宣伝教育」が盛んに行われた時点から、いわゆる「基地しわ寄せ論」や「火中のクリ論」³⁵などを経て、復帰思想の内実に微妙な変化が起き、民族主義的純度が希薄化したという。³⁶そのようななかで闘われた教公二法阻止闘争³⁷は、沖縄における教職員が「本土」以上の権利を自覚する契機となるはずであったが、そのような方向には向わなかった。³⁸この原因は、新崎によると復帰運動が「本土並み」の呪縛から逃れることができなかったということにあるのだが、それは、政府側に「民族的悲願としての祖国復帰」「国民的願望としての沖縄返還」というスローガンを先取りされ、「心情的本土・沖縄一体論」の主導権を完全に握られてしまったことにほかならない。

「国民教育」における謝花民権のとりあげられかたは、そのシンボル性において、「復帰」運動における「日の丸」と同様な役割を負ったように見受けられる。当時沖縄教職員会は「日の丸」を「祖国復帰・国民教育・抵抗・自由」のシンボルとして位置付けていたが、謝花民権のシンボル性もまさにそこにあり、両者がシンボルとして抱えた共通の問題こそが「復帰」運動の落とし穴だったのではないかと思われる。

4 「本土」知識人の「沖縄経験」と謝花

復帰運動が本格的に活発化したのは、一九六四年に佐藤栄作内閣が成立し、重要政策課題として沖縄の「日本返還」を設定した以降である。当時日米両政府は両国の防衛体制上、沖縄の施政権を日本に返還したうえで基地運営を行った方が有効であると判断し、一九六五年一月の佐藤・ジョンソン共同声明以後、政府主導型での「復帰」に向けて、準備が具体化されることとなった。一方、民衆運動の側からも、六十年安保闘争の挫折による閉塞状況に風穴をあけるため、「辺境地」沖縄における闘争が注目されるようになっていた。

このような「復帰」運動の盛り上がりの中で、一九六九年に大里康永の著書『義人謝花昇伝』が『沖縄の自由民権運動』として復刊され、「本土」の知識人からの反響を呼んだ。彼らの多くは、それまで沖縄問題に目をむけなかったことに対する「贖罪意識」から、謝花民権を自らの道義的責任に問い

掛けてくるものとして捉えた。⁽⁴⁰⁾

「本土」知識人のなかで、謝花昇に強いこだわりを持ち、なおかつ謝花像を提示しようとしていたひとりに大江健三郎があげられる。ここでは「本土」知識人にとって謝花民権とはどのようなものであったのか、大江を例に検討してみたい。

大江は沖縄問題に関わっていく中で自ら二つの命題を抱え込んでいた。一つは「日本が沖縄に属する」という命題、そしてもう一つは「日本人とは何か、このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか」という命題である。⁽⁴¹⁾そして、「日本が沖縄に属する」という前者の命題に対して、おそらく一般的な日本人ならば誰しもが感じるであろう「違和感」はなぜ生じるのかと考えていき、その理由は、一般的日本人の心のなかにある日本中心の「中華思想」的感觉であるという答えを導きだした。⁽⁴²⁾

このような命題を抱えた大江にとって謝花昇は、「日本人の『中華思想』的感觉に徹底的な戦いをいどみ、ついには狂気にまでいたる」人物として捉えられた。大江の具体的な「謝花」体験は、一九六八年の沖縄初の主席公選選挙の時にあった。それは、「僕が参加した屋良革新候補の様々な演説会で、候補者の名前を別にすれば、もっともしばしばその名のあげられるのを聞くのがつねであったのは、謝花昇にほかならなかった。」というものである。大江はそこで、「沖縄の具体的な希望」（「沖

縄生まれの人間が、正面から中央権力と対峙して戦うに十分な能力をもち、現実にもその闘いをおこなった」という意味において)の「具現者」たる「謝花」にはじき飛ばされたのではなく、逆に「謝花」についての知識を深めることで、中江兆民、謝花昇という二人の人物を「救済の橋」として「民主主義に関わる共通の先行者のイメージ」を「沖縄の日本人」とともに共有することができたという。⁽⁴³⁾

しかしその一方で、一九七二年、まさに核付き「返還」がなされようとしていた当時の状況は、謝花の神戸駅での発狂寸前の二つの眼をとおして見たとしたならば、「日本人のエゴイズム、鈍感さ、その場しのぎの展望の欠如」をつき付けられるものであり、大江はそれを自分の内なる日本的「中華思想」を暗く鋭く問われているものとして感じとったのだった。⁽⁴⁴⁾

大江のこのような沖縄返還に対する見方においては、「復帰・返還」に対して拒否の態度をとった「沖縄の若い知識人」の思想と行動も視野の中に入ってきていた。先述したように大江は一九六八年の初の主席選挙の際に革新候補・屋良朝苗の応援に参加し、そこで謝花昇のイメージに重ねるようにして「復帰運動の象徴的存在である教育家」⁽⁴⁵⁾の選挙運動がすすめられるのを目の辺りにした。大江はそこで「本土の日本人である僕」が「自分の想像力によって喚起する謝花昇という人間」と「沖縄の若い知識人たちが喚起する謝花昇という人間」との間に激しい衝突が起きているのを身をもって知ることになったのだ。⁽⁴⁶⁾

この衝突。裂け目は「沖縄の民衆の力をまるごとつつみこむようにして、新しい本土日本の保守権

力の沖縄支配にすくいこむ、その方向転換の彎曲パイプの役割を、公選主席と、その政府と、またこれを推した復帰運動の母体そのものが、せおいこまされたのではないか（傍点＝筆者）⁴⁹という大江の評価と、そのような「革新」の態度こそが矛盾に満ちた「復帰」を積極的に補完することになるのだという復帰拒否者の主張との大きなズレとして顕在した。⁴⁸

大江は謝花に「農業、林業についてのまったく新しい学識をそなえた農本主義的な」エリート技師の姿をみてとった。そのようなエリート技師が沖縄の現状に鑑みた科学的な開墾政策を構想し実践していく道筋において、横槍を入れる「本土日本」の権力を代表するものに對抗せざるを得ず、悪戦苦闘を重ねるうちに自由民権的な闘いに身を投じていったのであろうとの見方である。⁴⁹そして、謝花が「生まれながらの自由民権家」であるというような「神話」に対しては、「謝花昇がすべての状況を予見しつつことにあたったとする神話は必要ではない。」と批判しながらも、⁵⁰謝花が神話として民衆に広がりを持ったこと自体の意味を重くみた。いわく、謝花民権の「この短い期間こそ、沖縄の民衆において現実化される、自由民権運動の思想を見ようとする者らは、謝花昇について幾多の神話をつくらずにはいられなかった。民衆がみずから必要とする神話には、民衆規模の真実がふくまれている。それはしばしば、思想的な地下水のしるしである」と。⁵¹

大江は、謝花が残した「歴史」がしばしば「神話」という形をとりつつもなお、「今日の沖縄の真の『人間』を、やはり根本において勇気づける」力を重視したものと思われる。しかしだからといっ

て、そのような謝花像を破壊する試みを意味の無いものと切り捨てたわけでは決してない。むしろ「新しく沖縄の若い知識人たちのあいだにおこっている、謝花昇神話の批判への、いかにも執拗なところみが、なぜかれらにとってかくも切実に必要なのか、ということを考える作業」は、「復帰」問題に関連して最も重要な主題とみていたのである。そしてそのことに對する大江の答えは、「いわゆる祖国復帰運動の、現実の流れのすべての局面が、それをいま、沖縄の若い知識人に必要としているのだ」ということであつた。このような、「復帰拒否」に對する強いこだわりは、それらが、大江が復帰運動が内包するナショナリズム（「母なる祖国」へ還ろうという）に對して投げかけた「狂氣した謝花昇にどうして奈良原県知事の代表する中央集権としての日本が『母なる祖国』でありえただろう？」という問いにつながるものであつたからに他ならない。⁸²

(1) 謝花の出身地である東風平村において初めて謝花を顕彰した當山正堅は、親泊康永の取材中、「私たちが謝花のことをちょっと聞き出そうと思つても誰もよく話してくれない。謝花のことについてタブーで、これは県庁に謀反したということと、学問すれば氣が狂うということであるみんな恐れて話さない。（中略）君の投書によつて、きつとみんな共鳴するだろう」と言つたという。（『義人謝花昇伝』の背景―大里康永氏に聞く―『沖縄現代史への証言―上』新崎盛暉編（一九八二）沖縄タイムス社P一六四）

(2) 一九二九年に東京富川町（現深川区）で親泊が運営していた道連れ会セツルメントで開いた沖縄県出身の労働者による座談会の席上で、ある東風平出身の人物から「東風平謝花」の話聞き、関心を持ったという。（『沖

縄現代史への証言―上』（一九八二）P一五八・『自由への歩み―わが思い出の記』大里康永（一九八二）縄時事出版 P一六二

(3) 『義人謝花昇伝』刊行の目的について親泊自身は同著の緒言において以下のように述べている。「謝花昇の生涯を知ることによって一個の偉大なりし人物を知るといふことのみでない。我々は謝花の生涯を知り、これを追憶することによって沖縄の今後の進路を発見することができ、従って我々の真の使命を理解することができるのである。私が茲に謝花の伝記を述べんとする所以は実にこの点にあるのであって、彼の伝記執筆者としては、甚だ条件の乏しい私が、之を思い立ち、微力を盡して之に携はる所以は主に茲にあるものである。されば本書は内容から云へば謝花の伝記であるが性質から云へば生ける沖縄県民の開放の為に敢て大衆に訴へんとするものである。」（『義人謝花昇伝』（一九三五）P八）

(4) 謝花像はおおまかに分けるとすると、親泊（大里）以来のいわゆる「通説」とされたものと、新川明がそれを批判して提示したものの二つに代表される。そこで本稿では便宜上しばしば前者を「大里―謝花」後者を「新川―謝花」と略して表記している。

(5) 一九三五年に新興社から出版（新興社は一九三二年に東京神田にて親泊が創設した出版社）

(6) 当時、親泊が恩師である円谷弘教授に序文の執筆依頼に行ったところ、今の時代では民権思想のものは出せない、たとえ出したとしても結局検閲を通らない、と注意されたという。（『沖縄現代史への証言―上』P一六五―P一六七）

(7) 「親泊（大里）―謝花伝」は、親泊自身が蒐集した史料を戦禍で失ってしまった等々の理由から、その著作自体がその後の謝花研究における資料集のような役割を担うことになってしまった。その為か、これ以降の謝花論は、「親泊（大里）―謝花伝」の内容を継承するにしても批判するにしても、同著が書かれた背景、つまりどのような思想的文脈で書かれたのか、親泊（大里）の社会事業全体の中においてこれを位置づけるという視

点からの追究は全くなされてこなかった。

「親泊（大里）―謝花伝」に批判的に取り組み、新たな謝花像を提示した新川明は、「あくまでも謝花らの思想と行動をほとんど無条件に美化する一種の英雄伝記として書かれている点で、いわば典型的な善玉悪玉の文学作品（政治小説）と考える方が妥当という性質のものである」と指摘している。（新川明「〈復帰〉思想の葬送」『新沖縄文学』（一九七〇・一）P七七『反国家の兇区』（一九七二）現代評論社に所収）筆者はこの点について、『義人謝花昇伝』の執筆を親泊（大里）の社会運動の一環として捉えた場合、その実証性の低さを鑑みても、少なくとも「勸善懲惡的な小説」と見なすことは妥当ではないと考えるが、この点に関しては、本稿で詳述することは出来ないので、機会があれば別稿に譲りたい。

(8) 鹿野政直『戦後沖縄の思想像』（一九八七）朝日新聞社P四九六

(9) 鹿野政直『在沖縄アメリカ軍の文化政策と『今日の琉球』の発刊』『史観』（一九七九）P一七『戦後沖縄の思想像』（一九八七）朝日新聞社に所収

(10) 鹿野政直『『今日の琉球』をとらえてみた在沖縄米軍の文化政策』『日本歴史』（一九七九・八）P一『戦後沖縄の思想像』（一九八七）朝日新聞社に所収

(11) 鹿野「在沖縄アメリカ軍の文化政策と『今日の琉球』の発刊」P二三

(12) 仲泊良夫「自由民権運動の指導者 謝花昇」『守礼の光』（一九六四・三）P三〇

(13) 仲泊「自由民権運動の指導者 謝花昇」P三一

(14) 川平は連載当時、琉球政府文化財保護専門審議委員会 琉球政府県史編集審議委員会委員 那覇市史編集委員会委員

(15) 先島に対する政策については、自ら出張して現地を視察したのち、「八重山住民の苦しい状況や宮古の不平等の土地所有権を正すべきであると考え」、先島における行政改革をはかろうとした、と記している。『今日の

琉球』(一九六四・一二) P三七、P三八

(16) 『今日の琉球』(一九六五・一) P二九、P三〇

(17) 『今日の琉球』(一九六五・一) P三一

(18) 『今日の琉球』(一九六五・二) P三八

(19) 『今日の琉球』(一九六五・三) P三五

(20) ただ、公同会運動に対する謝花の態度については、これに反対するのは当然のこととし、「東平風という農村から出ており、ようやく封建社会が開放(ママ)されたのですから、これを再び王朝時代の機構そのままに復すのは首里那覇の士族出身にのみ利益になるだけだと考えられ、これら首里、那覇お士族に一種の反感も手伝って、沖縄県民のために、自由平等を叫び、沖縄における特権階級の手によって沖縄が支配されたんでは、一般県民が不利になるばかりであるとかかなり酷な非難をしました。」(『今日の琉球』(一九六五・二) P三六) というように、特権階級に対する抵抗という側面はある程度評価されている。

(21) 『戦後沖縄の思想史像』(一九八七) P一八三

(22) 一九二二年大分生まれ、共同通信記者などを経て、一九六七年当時国民教育研究所長

(23) 森田は「沖縄の教師・父母、そしてすべての県民の教育に関する願い・要求は、ただ子供たちを、ちゃんと「日本国民」として育てたい、ということ、この一言につきるだろう」と述べている。『アメリカの沖縄教育政策』(一九六六) 明治図書 P九、一〇

(24) 『アメリカの沖縄教育政策』(一九六六) P一一

(25) 森田は「日本復帰運動」について、「アジアの、また全世界の諸民族の、独立と統一、民主主義の実現民族文化の自主性の確立、という課題の追究と相通じ、また諸民族が、自らの課題の追究を通して世界史の進歩に寄与しようとする、その実践と相通じるものであり、必ず実現するものである」というように、ある種の民族

運動と規定している。（『アメリカの沖縄教育政策』P一六）

(26) この点に関連して森田は、「日本の近代の歴史に、支配階級の人民統治、とくに沖縄差別の政治を克服すべくたたかってきた人々、その伝統を必ずもっているはずだ。そう考えないわけにはいかない」と述べている。『アメリカの沖縄教育政策』（一九六六）P二三

(27) 『アメリカの沖縄教育政策』（一九六六）P二八八

(28) 森田俊男『沖縄問題と国民教育の創造』（一九六七）明治図書P一四三

(29) 森田『沖縄問題と国民教育の創造』（一九六七）P一四七

(30) 森田『沖縄問題と国民教育の創造』（一九六七）P一三四

(31) 森田『沖縄問題と国民教育の創造』（一九六七）P一四五

(32) 『アメリカの沖縄教育政策』（一九六六）P九

(33) 勿論この問題は森田個人の問題ではない。例えばそれは「自分の教えている子供たちに、自分がいわゆる日本民族である、日本国民だという意識をどう植え付けるかということが、最も難しい課題である」というような一教育者の発言としても端的にあらわれている。（那覇商業高等学校教諭「沖縄でヤマトダマシイを教える難しさ」〈座談会〉月刊時事 一九六七・一〇）

(34) 『シンポジウム沖縄—引き裂かれた民族の課題』P八六（一九六八・四）三省堂

(35) 日米安保条約改定交渉の過程で、アメリカの軍事拠点になっている沖縄を共同防衛地域に含めることは、アメリカの戦争に日本が巻き込まれる危険性を増すものとして反対する意見がでてきた。こうした発言の中には「沖縄を含めることは火中のクリを拾うようなものだ」というニュアンスが含まれていた。

（新崎盛暉『沖縄大百科事典 上』（一九八三）沖縄タイムス社 P七一八）

(36) 新崎盛暉『戦後沖縄史』（一九七六）日本評論社 P二二四

(37) 「地方教育区公務員法」「教育公務員特例法」の制定阻止のための闘争。教公二法は教職員の政治活動を本土並みに制限することが意図されていた。

(38) 新崎『戦後沖縄史』 P 二八七

(39) 新崎『戦後沖縄史』 P 二七八

(40) この時の反響については我が部政男が「謝花民権と国政再参加」(『展望』一九七〇・一二筑摩書房)の中で大江健三郎、木下順二、永積安明、藤島宇内、色川大吉などの書評等を数点紹介している。(『近代日本と沖縄』(一九八一)三一書房に所収 P 四四〇・四九)

(41) 「日本が沖縄に属する」『沖縄経験—大江健三郎同時代論集』(一九八一)岩波書店 所収 P 八六

(42) 大江がこのような命題を立てたのは、沖縄返還交渉が新たな「琉球処分」ともおぼしいかたちで押し進められた原因を、単に権力の側の問題としてではなく、日本人全体に深く根ざした意識にあるとみたからであり、その意識というのは日本人の痼疾としかいいようのない「中華思想」にはかならないという問題意識からだと思われる。

(43) 「内なる琉球処分」『沖縄経験—大江健三郎同時代論集』所収 P 一五三・一五五

(44) 大江は奈良原県知事について、「いうまでもなく奈良原という名は、ここで端的に、日本の「中華思想」的感覚に肉を与えた存在の呼び名として理解されるべきであろう」という見方をしている。(「内なる琉球処分」『沖縄経験—大江健三郎同時代論集』所収 P 一五八・一六二)

(45) 大江健三郎「謝花昇と沖縄」『思想史を歩く 上』(一九七四)朝日選書 P 二六

(46) 大江「謝花昇と沖縄」『思想史を歩く 上』P 九

(47) 大江「謝花昇と沖縄」『思想史を歩く 上』P 二七

(48) 新川は大江や中野好夫などが沖縄の革新候補者の選挙応援に参加することに対して批判的であった。新川は「本

士」知識人の思想的・政治的責任について「日本の人たち、とりわけ積極的に沖縄とかかわろうとする知識人は、一種の原罪意識をてみずからを律するあまり（中略）沖縄人みずからが獲得してきたたかひの成果の肯定的側面だけで沖縄のすべての運動と思想を包括し、その運動が片方に不可避的に内在させてきた否定的側面について、ほとんど考慮を払わない憾みがあるように思います」と指摘した。（新川明「大江健三郎への手紙」

『反国家の兇区』P四九）

(49) 大江「謝花昇と沖縄」『思想史を歩く 上』P二五

(50) 大江「謝花昇と沖縄」『思想史を歩く 上』P一七

(51) 大江「謝花昇と沖縄」『思想史を歩く 上』P二二

(52) 大江「謝花昇と沖縄」『思想史を歩く 上』P二五・二六

三 「アメリカ世」から「日本世」へ ―世替りのなかで―

一九六九年十一月の佐藤・ニクソン共同声明により「七二年返還」の決定が下された。しかしその「返還」の内実は、米軍基地の継続・核疑惑など、あまりにも沖縄住民の要求を無視したものであり、望ましいかたちとは程遠いものであった。このような「返還」が現実のものとして突き付けられたとき、沖縄内部において「復帰とは何か」というすぐれて思想的な問いが浮かび上がってきた。⁽¹⁾しかも、一九六九年の二・四ゼネストが、保守・革新双方からの「本土」組織の圧力によって失敗に終わっ

たことにより「本土」に対する不信感が高まっており、徐々に顕在化してきた沖縄内部の「復帰」に対する考え方のズレは、一九七〇年秋の国政参加選挙をめぐる激しい対立を見ることになった。そして、謝花民権はこの国政選挙をめぐるイデオロギー論争における一つの題材となったのである。

1 「反復帰」思想

新崎盛暉は、二・四ゼネストの挫折を「祖国復帰運動・復帰思想の敗北」であり、政府による「沖縄返還政策の成功」と位置づけている。⁽²⁾確かにこの頃から「復帰」に対する考え方に明確な分岐がみられ、一方の極ははっきりと「復帰」を拒絶する方向へ、もう一方の極は、取り敢えず「復帰」を果たすことで本土との障壁をなくし、そこから新たな闘争の手掛かりを見つけようという方向へと流れていった。

このうち、政府の決定した「返還」に対し、はっきりと拒否の態度を打ち出し、反権力志向を明瞭にした動きが「反復帰」の立場である。「反復帰」論者の一人である新川明は、謝花民権が「復帰」運動のシンボルとなっていた状況下において、自らの立場にたって、「日本復帰」と重ね合わされて語られる謝花の「虚像」を崩す作業を行ったのである。ここでは、新川の謝花論があくまでも「反復帰」論の一環として出されたものであるという理解に拠って、〈新川―謝花〉の具体的検討に入る前に、新川の「反復帰」思想について触れてみたい。

まず、新川による当時の「復帰」運動の捉え方からみていきたい。新川は、沖縄戦後のいわゆる「祖国復帰運動」について、「一定の反権力闘争」抵抗運動であり、同時にそれは「日本」国民意識の発揚として、きわめて強力な日本（本土）志向の思想と運動であった。」と規定している。⁽³⁾

そして、そのような日本「復帰」運動の思想と行動は、「日米による沖縄の分断支配が、その体制維持のために半永久的な様相をもって固定化されていた時」においては、「米国軍事占領権力と、そこに示されるアメリカ帝国主義の極東戦略体制、ならびにその庇護のもとで帝国主義的な軍事国家への再生を急いできた日本政府・自民党」日本独占資本の体制志向に鋭く対立し、沖縄の分断支配によって成立していた両者の存立を、その内側から脅かすたかいたとして一定の力「戦闘性」をもち得ていた。」と評価している。しかし、この日本「復帰」運動の結果として得られた「七二年沖縄返還」は、「支配の側がその支配を再編強化」する以外の何物でもなかった。⁽⁴⁾新川は「復帰」運動が最終的に日米支配層に巧妙にすくい取られて挫折してしまったのは、日本「復帰」運動が、本来的に「異民族支配からの脱却」「同一民族として本来の姿に立ちかえる」という発想によって唱導されたナショナリズムの運動であった」ことに起因するとみていたのである。⁽⁵⁾

したがって、一九六九年段階で「復帰」運動のスローガンとして鮮明化された「反戦復帰」論⁽⁶⁾の基盤となる「あるべき日本」への「復帰」、ないしは、現実に空洞化されている平和憲法を本来的な

姿に蘇生させる形での「復帰」という主張も、新川が言うところの「復帰」思想―日本志向のナショナリズムの側面を思想的に克服しないかぎり、同じことの繰り返しであり、それを阻止するためにこそ「反復帰」を唱えなければならなかったのである。⁽⁷⁾

それでは、新川の「反復帰」論とはどのような性格のものであったのであろうか。新川の立場は、日米共同声明による「返還」路線が推し進められるなかで、すぐれて思想的な意味で「反復帰」を主張するというものであった。したがって、新川が「反復帰」というときの「復帰」とは、「分断されている日本と沖縄が領土的、制度的に再統合するという外的な現象」を指すのではなく、「沖縄人がみずからすすんで〈国家〉の方へと身をのめり込ませていく、内発的な思想の営為」を意味している。⁽⁸⁾そして、新川の言う「反復帰」とは、「個の位相で〈国家〉への合一化を、あくまで拒否しつづける精神志向」であり、反復帰Ⅱ反国家Ⅱ反国民（Ⅱ非国民）志向であるということが出来る。その意味で、実際の政治行動としての「復帰拒否」ということに限定されるものではなく、「沖縄人が国家としての日本に対して持ちつづけてきたのめりこみの心情」を鋭く引き裂くものとして捉えられているわけである。⁽⁹⁾

このような、新川の「反復帰」論は、「沖縄独立」論ないしは「沖縄自主政府」論と同様に捉えら

れがちであり、事実、一九七〇年当時も、山里永吉などによる琉球独立党⁽¹⁰⁾の動きと同一視され、現実に実現不可能な「空論」であるという批判を受けた。例えばそれは、「復帰拒否」をして「日本国民と離れるのだ、別個なんだということになったら、アメリカの大きな力をはたして沖縄県民だけでなくがえし得るのか。(中略)沖縄の自治なんていうのは、これは一つの夢物語、実現できないものじゃないか」という意見としてあらわれた。⁽¹¹⁾

しかし、新川は「復帰拒否」を言うことで、あくまでも国家に絡め取られてしまう原因であるところの、内なる日本同一化志向をつき崩そうという「いきかた」の問題として「反復帰」論を主張したのである。

新川自身、琉球独立党に対しては、「たしかに沖縄の独立を主張する同党の主張は、国家としての日本に対する忠誠を拒否する点で、今日国家に対するもっともラジカルな反逆の行為を備えている。」という評価を述べつつも、次の二点において厳しい批判を加えている。一つは同党の主張に「反日本」はあっても「反米軍基地」がないこと。すなわち、「かつて沖縄が日本から受けてきた歴史的に明白な抑圧と差別を楯に、日本Ⅱヤマトに対する露骨な嫌悪としての『反日』はあっても、現存し沖縄の現状を基本的に規定する米軍支配に対する『反軍事基地』の明確な視点はかけている」という点である。⁽¹²⁾もう一点は、結局は二五年間に自分たちがつちかってきた特権的な利権を守ろうという意識から「独立論」を唱えているにすぎないということである。⁽¹³⁾

沖縄独立党の主張は、あたかも琉球王国の再現を目指しているような印象をあたえるアナクロニズム的政治主張であるという点で、新川の意図した「国家体制を撃ち、これを粉碎していくため」の思想とは全く相容れない性質のものであった。

新川の「反復帰」論は、日本「復帰」思想に内在する、「国家幻想」「憲法幻想」「大大和（ウフヤマトウ）幻想」¹⁴⁴を打破するための手段としての「思想」とでもいうべきものであり、そのために彼は、沖縄（人）が日本（人）に対して根強く持ち続ける「潜在的な距離感」の深さに由来する「差意識」、日本（本土）に対する決定的な「異質感」を突き出していくことを主張する。¹⁴⁵そうすることによって、日本と等質化を願う、日本志向の「復帰」思想を打ち砕き、「反国家の拠点としての沖縄の存在を確保し、その沖縄をして〈国家としての日本〉を撃つ、つまり、国家解体の爆薬として日本の喉元を扼することができるといふ」¹⁴⁶。

一見、激しい沖縄ナショナリズムの発露のようにみえる新川の「反復帰」反国家」論の最終的な目的は、一言でいうならば、まず「国家」を徹底的に相対化し、そのうえで初めて可能となる沖縄と「本土」とのつながり方の可能性を探るということにあったように思われる。前者は、「差意識」「異质感を、日本（本土）につきだしていくことで、「国家権力を思想的にも生活感覚的にも相対化し、強制される文化（意識）の画一化」中央集権化に抗する可能性に、現実性を与える」ということ。¹⁴⁷そ

してそのためには、体制側から押しつけられる七二年返還へのプロセスを絶対的に「拒否」していく必要があった。後者については、新川の「反復帰」論が、「真の意味における沖縄と日本の人民的な連帯」を得るためにこそ、沖縄において日本との「異質感」を徹底的に自覚する必要があるという主張でもあったということである。新川は「民族統一」を声高に叫ぶ「復帰主義者」の「形式的な統一戦線論」や「本土人民との連帯」が、「憲法幻想・国家幻想」を媒介にしている以上、全く無内容なものであると考えていた。それに対して、「沖縄において日本（本土）に対する決定的な「異質性」を思想の基底におきながら、〈国家としての日本〉を相対化し、無限に否認していくことを、沖縄の闘いで多様に深めるとき、日本（本土）において同様の闘いを闘う人びととのあいだ」で「連帯」が可能になると主張したわけである。¹⁸⁸

このような「異族」の論理に拠って立つ新川の「反復帰」の主張には、吉本隆明からの思想的影響が色濃く感じられる。例えばそれは、新川の「反復帰」論における時間感覚にみてとれる。新川は、「日本と等質化をねがう日本志向の『復帰』思想を根底のところから打ち砕き得る沖縄土着の、強靱な思想的可能性を秘めた豊穡な土壌」としての「差意識」を、「せいぜい二千年そこらの昔、大和王権による政治的統一で国家形成がなされたヤマトウ（日本国）の成立よりも遙か以前から、そのヤマトウ（日本国）」とは別に独自の文化圏を形成して近代に至った沖縄の歴史的、地理的条件」によって

形成されたものとした。⁽¹⁹⁾ このような歴史的時間に対する捉え方は、吉本による、「琉球・沖縄の存在理由を、弥生式文化の成立以前の縄文的、あるいはそれ以前の古層をあらゆる意味で保存しているところにもとめたい」⁽²⁰⁾ という主張を思い起こさせる。

吉本は琉球・沖縄を、弥生式文化の痕跡が保存されている「辺境」と捉えるのではなく、「弥生式文化Ⅱ稲作農耕社会Ⅱその支配者としての天皇（制）勢力Ⅱその支配する〈国家〉としての統一部族国家、といった本土の天皇制国家の優位性を誇示するのに役立ってきた連鎖的な等式」を寸断し、大和王権を中心とした「本土」の歴史を相対化する可能性を有するものとして重視した。⁽²¹⁾ そして、当時の「沖縄問題」を解決するためには、根底的な思想的追究が不可欠だと提言した。それは、「琉球・沖縄は現状のままでも地獄、本土復帰しても、米軍基地をとりはらっても、地獄」であり、「本土の弥生式以後の国家の歴史的な根拠を、みずからの存在理由によって根底から覆しえたとき、初めていくばくかの曙光が琉球・沖縄をおとずれるにすぎない」という厳しい現状認識に拠るものであった。⁽²²⁾

このような問題意識から「沖縄問題」を追究していった場合、必然的に突き当たる障害として、〈本土の人間も日本人だ、沖縄の人間も日本人だ〉という学問的・思想的な「モチーフ」が存在した。⁽²³⁾ 吉本にしてみれば「沖縄の住民が日本人であるということとは、申すまでもない前提」であったが、そのうえで、〈本土の人間も日本人だ、沖縄の人間も日本人だ〉というモチーフが貫かれることによって、「沖縄問題」が「本土復帰とか祖国復帰とか、本土への奪還という観点に全部吸収され、帰着し

ていくということになる」ということを問題にしたのである。²⁴

吉本のへいても地獄だ、退いても地獄だ」²⁵「沖縄返還とか奪回とか復帰なんてナンセンス」という主張は、²⁶沖縄の人を本気になって怒らせ、「沖縄問題」「南島問題」を日本の国家・国家権力を根底的にくつがえすための思想的な問題として追究するようしむけるためのアジェンションであった。

新川ら沖縄の若い知識人にとって、このように吉本によって飛ばされた檄が刺激になったことは想像に難くない。だがここで新川の「反復帰」論が吉本の「南島論」の請売りだと指摘してみても全く意味はない。新崎盛暉が指摘するように、一九六七年頃からベトナム戦争の軍事的拠点として沖縄がクローズアップされたことにより、新左翼勢力が日米軍事同盟再編強化のための「返還」政策を潰そうと「沖縄闘争」を展開した。²⁷新川自身は新左翼系のセクトとは一線を画したが、時にはそれらの勢力とも共に結集して運動をすすめた。²⁸このような背景、そしてこれらの勢力における吉本の思想的影響力を考えてみても、新川の「反復帰」論が吉本の「南島論」をうけてそれを沖縄において捉えなおし、独自に展開したという側面を持つものと指摘することができるかもしれない。²⁹

しかし両者において決定的に異なる点は、吉本の「異族論」「南島論」が、どこまでも天皇制や国家を無化するための手段とされていたのに対し、³⁰新川の「反復帰」論は、どのようなかたちで「沖縄人でありながら日本人となる／ならされる」のか、という自己の生き方において極めて切迫した問題として論じられたということであろう。

2 国政参加選挙と謝花民権

多くの謝花に関する論考が、一九七〇年秋の沖縄国政参加選挙の前後に登場している。これが、単なる偶然ではない事は言うまでもない。

一九六九年十一月の佐藤・ニクソン共同声明以後、復帰協を中心とする運動は低迷状態を続けていた。それには一九六九年二月の二・四ゼネストにおける挫折が大きく影を落としていたと思われるが、この頃から新川ら既成政党に属さない左翼勢力から屋良「革新体制」に対して一層の批判がなされるようになった。そして、国政参加選挙を目前にして革新政党がこの選挙を「民衆の権利要求に対するようになつた。そして、国政参加選挙を目前にして革新政党がこの選挙を「民衆の権利要求に対する日本政府・自民党の譲歩であり、日米共同声明に対して沖縄の民意を示すチャンスである」と評価して、⁸⁰本土と沖縄との系列化を含め、積極的に取り組むという事態が生じるに至っては、新川らは投票ボイコットという形での「国政参加拒否闘争」を展開した。

国政参加が、日米共同声明を確立するにあたって、沖縄の合意を取り付けるためのものであるということは、沖縄においてほぼ一致した認識であったといえる。しかし、それにどう対応するのかということになる、これに積極的に取り組んで要求を勝ち取ろうとするのか、それとも拒否するのか、という違いが生じた。これは、「復帰」そのものに対して、不本意な内容ながらも民衆の運動により、勝ち取ったものとして一定の評価を下し、さらなる闘争に取り組もうとするのか、それとも、体制側

が民衆のうねりを先取りする形で自らの体制強化のために実現したものと拒否するのか、ということに直結した問題であった。ここではこのような裂けめの中で、謝花民権がどのように論じられたのかをみていきたい。

新里恵二ら沖縄歴史研究会に集った研究者は、「七二年復帰」の内容には不満ながらも、国政参加選挙において勝利を得ることによって自分達の要求を勝ち取ろうという、革新政党の動きに深くかわる形で謝花民権を顕彰した。彼らの謝花論は、おおよその内容については「大里―謝花」をほぼ受け継いでいるが、その記述の枠組みは明らかに当時の人民闘争史研究の流れに添ったものといえる。すなわち、人民は権力に対して闘争するものであり、猶且つ連帯して闘うべきものであるという前提にたち、謝花の「自由民権運動」を日本「本土」と沖縄の差別を越えた民衆の力強い連帯と「真の民族統一」の可能性を示したものと捉えた。³³⁾そして、謝花以来の「ねづよい抵抗の伝統」を自らの革新勢力が継承していると、³⁴⁾謝花民権を「復帰」及び国政参加選挙のシンボルに据えたのである。³⁵⁾

新里恵二は、謝花の「自由民権運動」における「二つの志向」（「民族的志向」と「民主主義的志向」）を指摘し、その「政治路線の正さ」を高く評価した。「民族的志向」とは、「地方的な分散を求めるのではなくて、近代的な国民国家としての日本の中に統合されることによってこそ沖縄県民は

幸せになれる」という志向であり、具体的には「旧琉球王国の支配層の沖縄の独自性主張、日本本土への統合拒否」の動きに対する反対行動としてあらわれたものをさす。また、「民主主義的志向」とは「本土の支配階級が押しつけてくる沖縄に対する差別や非民主的支配に対しては徹底的に反対し、民主的変革を求めてたたかっていく」という考え方をさす。

また、新里は謝花民権の運動理念を「統一そして自由」と表現した。新里によれば「統一そして自由」とは、一八四〇年代にマルクスやエンゲルスが掲げていたスローガンであり、その意味するところは、ドイツ民族の統一を要求すると同時に封建的な諸侯による支配に対しては反対し、民主主義的要求を勝ちとるということであったが、それと同じような理念を謝花らの運動は体現していたというのである。⁶⁴

このような謝花民権についての評価の仕方が、新川の謝花批判とかみあわないのは明らかである。新里は謝花の「民主主義的志向」として、「日本の国家権力に対してあくまで沖縄の自主性を主張し、差別の撤廃を求めていくという態度」をあげている。⁶⁵しかし新川においては、日本（本土）に対する「差別の告発」と、沖縄の「自主性、独自性」の主張とは相容れないものと捉えられており、むしろ、日本の国家権力に対して差別の撤廃を求めることで、沖縄の自主性は失われ、結果として積極的に国家に取り込まれていくことになる指摘しているのである。従って、近代国民国家としての民族統一過程において、いかにして沖縄の自主性を守るかという可能性を提示し得なければ、それは、謝

花らの運動における「民族的な志向」を指摘したにとどまるということになる。⁽⁴⁰⁾

一方新川は、先述したように、沖縄の意志を無視した形での日米共同声明路線に対して有効な力を持ち得るのは、「体制の要請を鋭く拒否する精神（思想）」だけだと考えていた。したがって、国家幻想にもとづく国政参加に没入することで「差別なき復帰」を勝ち取ろうという「革新」的思考は、必然的に体制順応を志向するものとして否定しなければならなかった。⁽⁴¹⁾

新川は、既成の革新政党や大衆団体が「国政参加は日本国民として当然の権利の確保である」という設定を行なうのは、「復帰」思想における日本同化志向の思想的な流れの当然の帰結であるとみていた。⁽⁴²⁾「自らも等質の国民でありながら、その資格や権利を正しく認めてもらえないこと」を国家に告発し、「完璧な日本国民としての資格取得を希求する」という行為は、結果的に沖縄の皇民化と天皇制支配を補完することになった「沖縄の内側から『近代化』と『日本国民としての等質性』を、はげしく希求」するという、沖縄の近代以降くり返された「思想」や「運動」の延長線上にあるものと規定したのである。新川は、この「日本同化志向」の思想的源泉に謝花昇の「自由民権運動」と伊波普猷の「沖縄学」を位置付けた。⁽⁴³⁾

したがって、「復帰」論者が「謝花民権」と「日本復帰」を重ねあわせて、「下からの民族統一」ということを前面に押し出せば押し出すほど、「反復帰」論者は「復帰」運動のシンボルである「謝花民権」を批判せねばならないという構図が成立していたのである。⁽⁴⁴⁾

そこで、これまでみてきた背景を押さえたうえで、新川による「謝花昇のほとんど絶対化されている偶像」から粉飾を剥ぎ落す作業⁽⁴³⁾を、ポイントを絞って検討していきたい。

①謝花民権の思想的基盤について

東京留学中の謝花について、通説では、謝花は中江兆民・幸徳秋水・木下尚江らと接触・交流をはかり、思想的影響を受けたとされている。これに対して新川は、「事実無根の虚構」であり、「学問上はもとより、思想的にも影響を受けたのは農科大学の恩師・横井時敬を唯一とするだろう」という考えを示している。⁽⁴⁴⁾また、仮に謝花と中江・幸徳の間に若干の接触があったとしても、「思想の本質的な次元において、この両者のあいだにほとんどつながりはない」と考えるべきであるとしている。⁽⁴⁵⁾

新川の指摘するように、横井時敬からの学問的影響は謝花の論文等から検証することが可能だが、兆民等の思想的影響についてはどうやっても推測の域を出ることはできない。しかし筆者は、大江健三郎の、謝花が兆民の言うところの『泰西的農学士』となって沖縄の『封建割拠の遺習』にたいする、もつとも効果的な、最初のたたかいを指導した人間であることは、それを事実において否定することはできない。その際に謝花昇と中江兆民の、思想的なつながりを敢えてたち切ってしまう必然性を、僕は見いださぬのである⁽⁴⁶⁾という意見を重視したい。

②「階級打破の象徴」としての謝花について

謝花が沖縄に技師として帰県し、「東平風謝花の名はやがて階級打破の象徴になった」ということは、伊波普猷の言葉を引いて度々言及されてきた。⁽⁴⁶⁾ 新川は、この「階級打破の象徴」についての従来の捉え方に異義を唱えた。謝花の存在は、「農民は奴隷者であるという既成観念が深く根をおろしている当時の沖縄社会」において、「農民出身の子弟でもその才能次第ではいかなる高位高官にも就けることを具体的に示した」という点で「階級打破の象徴」なのであって、⁽⁴⁷⁾ 「反奈良原の運動を实践した」と関連させて、階級打破の实践者としての象徴（傍点＝筆者）と解釈するのは誤りであるという。⁽⁴⁸⁾ 新川が、謝花に認める「象徴」性は、まさに「四民平等」を意味するところの、「謝花によって体现された『栄光』が、当時の沖縄人社会、とくに平民層に与えた刺激と影響」の大きさ、という点においてであり、⁽⁴⁹⁾ だからこそ、「奈良原と旧支配層出身の特権階級」が「共同戦線」を組んで「象徴」たる謝花を徹底的に攻撃する必要があったとするのである。

新川は、県技師に就任した謝花について、「もはや一介の『農民の子』ではなかった。沖縄が生んだ初めての『学士様』であり、県内官界で沖縄人としては唯一最高のエリートであった。」という評価をし、⁽⁵⁰⁾ その謝花が、農民の立場から奈良原に代表される支配権力に抵抗したというのは全くの虚構にすぎないとしている。だが、その一方で、旧支配層が奈良原と結んで「階級的使命」から「新興エリート」の『象徴』である謝花の台頭を抑圧し、これに対して謝花は「旧支配層の、『復権』の動き」は断じて許すことはせず、ここから「謝花と旧支配層の決定的な対立抗争の動きが表面化した」

と述べている。⁵¹⁾こうなると、やはり結果的に謝花が農民出身であるということが重要な意味をもってくる。したがって先の「階級打破の象徴」の意味の解釈の仕方もばやけてきてしまうし、そもそも「階級打破の象徴」性について述べる際に、それが実践と結び付いていないといって批判するのはあまり意味がないように思われる。

③県技師としての謝花について

在官中の謝花について、通説においては農民の側にたち、県知事の杣山払い下げ政策に抵抗したことになる。これに対して新川は、「この時期の謝花はむしろ開墾反対を唱える農民を高圧的に封じる『良吏』として存在している」という見方を示した。⁵²⁾これは、「貧窮無禄士族たちの救済（授産）をはかり、あわせて産業をおこして食料の増産をはかろうという開墾政策」は、謝花の立案によるものであろうという推測から、謝花の杣山巡視の報告書を読み解く作業を通じて、⁵³⁾「当時の沖縄で、林政・農政について第一人者として自他ともに認める謝花が、その信念と使命感にもとづいて、大義名分の明らかな杣山の開墾を、そのたてまえどおりに実現するために」地元農民の反対に対して、「高圧的な『官人』」の態度をとったのであり、「『良吏』たろうとして、みずからの持てる才能を大いに発揮しよう」と意気込んでいる青年技師の姿以外の何物でもない」という結論にいたっているのである。⁵⁴⁾

また、謝花が杣山開墾事務主任の職を解かれた理由についても、定説のごとく「奈良原の開墾方針

に強力に反対しつづけたために、左遷された」⁵⁶のではなく、「沖縄人ではいかに有能なものでもこれを冷遇する極端な差別政策」をとっていた奈良原県知事が、「地元農民とのトラブル」を利用して左遷したのではないか、としている。⁵⁷

このような新川による県技師としての謝花評価の仕方を見ると、従来の図式的な謝花論を批判しながらも、自らが民善、官悪という二元的な捉え方にはまって、「良吏」として生きようとした謝花は農民に高圧的であったはずだという前提のもと、そのことを強調し過ぎているのではないかという疑問が生じる。

④参政権獲得運動について

新川は、謝花らによる参政権獲得運動は今日いわれているような、真に民衆のためを考えてなされたものではないとしている。⁵⁸

『琉球新報』に拠る旧支配層出身の人たちや「明治政府＝県当局」は「沖縄ではまだ土地整理がおこなわれていないので、そのまま選挙権を与えるのは公平を欠く」という理由から、謝花の参政権運動に対して強く反発した。このことについて新川は、明治政府は、土地整理事業が完了してもいっこうに改定選挙法を施行する気配を見せず、施行まで九年を待たなければならなかったという歴史的事実から、土地整理や税制等の問題は単なる口実でしかなく、「本心ではとにかく沖縄人に選挙権を与えることは好ましくないと考える姿勢が一貫していた」のであり、「このような政府の姿勢が、旧

支配層出身特権階級の利害と一致していた」としている。⁶⁶⁸

このように明治政府や旧支配層の問題点に言及しつつも、それに対抗する動きとしての謝花らの参政権獲得運動については、沖縄社会内における自己の勢力拡張の手段にすぎないのではないかというのが新川の見解である。⁶⁶⁹ その理由としては、一九七二年当時「沖縄出身の新聞人では最年長の長老」であった仲吉良光が、謝花の参政権運動は「農工銀行の株式保有高や役員の割り振りをめぐって優勢を確保することができた状況を背景に、政界においてもその勢力を一気に確立していこう」という動きだったのではないかと証言したこと。また、謝花の運動に護得久朝惟という首里出身の士族が参加していた事実を挙げている。すなわち、謝花の運動は護得久という首里の有力者を味方に付けることで「時の旧支配層特権階級の大番頭と手をにぎり、仲よく沖縄の勢力を二分し合おう」という動きであり、「そこに民衆の側に立つ『民権家』の面影」を見いだすことはできないというのである。⁶⁷⁰ 新川にしてみればこのような性格を持つ謝花民権が、土地整理問題に関して農民の組織化に成功しなかったのも、「土地整理問題の本質に目を向けることなく、多分に勢力扶植の手段としてその組織化を考えた」当然の結果ということである。⁶⁷¹

以上、四点ほどに絞って新川による「偶像としての謝花」批判についてみてきた。確かにこれらの批判点を提示した上で構築された謝花論は、新聞史料を駆使したことにより実証性が飛躍的に高まっ

た。しかし、利用された新聞史料やインタビューについての史料批判という作業面ではかなりの問題が残るように思われる。

例えば、新川は、謝花が杣山開墾事務主任の職を解かれたのは奈良原に反抗したことが理由ではなく、地元農民とのトラブルにあったとしている。この根拠となっているのは、太田朝敷が『沖繩時論』（謝花らが発行した雑誌）攻撃のために書いた『琉球新報』の記事である。新川はこの記事の史料的価値について、「それが悪意丸出しの文脈のなかで書かれているだけにかえって真実性をもっていると見ることができる。敵対者は相手を非難攻撃するばあい、相手の功績は『何もない』と抽象的に片付けるのに反して、相手の欠点や誤りは具体的にこれを指摘して暴露するのが常であるからだ」と述べている。⁸⁴しかしながら、このような史料批判の結論にはやはり無理がある。当時謝花民権と対立していた『琉球新報』の記事を部分的に引用する際には、かなりの注意を払わなければならないだろう。

これまでみてきた新川の謝花論のうち、特に強調された謝花民権の否定的側面を纏めてみると、おおよそ二つのポイントがみえてくる。一つは「差別撤廃運動」としての側面であり、もう一つはそれが結果的に沖繩の天皇制国家体制への包摂を補完するということである。

新川は謝花らの民権運動が「日本ナショナリズムの否定」天皇制国家否認の思想的前提に立たない

差別撤廃運動だった」という点で、結局、「差別を成り立たせている関係を逆に固定化することにしかならないのではないか」と指摘している。⁶⁵つまり、謝花の運動は「差別を作り出す根源的なものを撃ってゆく姿勢ではなくて、むしろ差別を作り出してゆくものの地位にまでみずからを引き上げることによって差別からの脱却をはかる」という性格の「差別撤廃運動」であり、⁶⁶その過程で「日本人としての国民的自覚を促し、そのことによって沖縄人の日本同化」皇民化に積極的な役割を担ったことを見逃すことはできない」というのである。⁶⁷

新川は謝花らの参政権獲得運動を思想的に支えたのは「明治憲法体制に対する強烈な救済願望（『幻想』）であつたとみている。⁶⁸そして謝花民権における「明治憲法体制に対する幻想」は、「本土」における自由民権運動の「民権右派にみるいわゆる『国権のための民権』という発想と論理」が招いた方向性と同様に、皇民化―天皇制国家体制へ包摂される過程を沖縄の側から補完する役割をはたしたとした。⁶⁹

このような見方に拠った時、一九七〇年の国政参加選挙は、「本土並み」を求める「差別撤廃運動」という意味において、再び国家体制にのみこまれる過程を沖縄側から補完するものとして位置付けられる。新川はそこで叫ばれる「悲劇の英雄」としての謝花像に対して、「謝花昇の民権運動が沖縄近代の皇民化政策に下からの補完作業として機能した役割」をとらえかえす必要性を痛感したのである。

新川の「義人」としての謝花を否定するという作業は、「謝花昇の思想と行動を否定するため

はなく、特定の政治的主張に短絡させて、歴史の真実を不当に粉飾する」「復帰論者」の「虚偽を打ち砕くために必要」とされたのであった。⁶⁸⁾

(1) 新川明「沖縄の思想課題とは何か」『物呉ゆすどー沖縄解放への視角』沖縄研究会編（一九七〇）田畑書店 P 二七

(2) 新崎盛輝『戦後沖縄史』（一九七六）日本評論社 P 三三〇

(3) 新川明「沖縄と70年代」『沖縄タイムス』一九七〇・七・一四

(4) この点に関して内山秀夫は「政治運動のアイロニー」を指摘した。それは、「政治運動の目標は実現可能性をもちながらも、その実現が徹底的に阻碍された時に、人間の生きる意思の投影となり、エネルギーの作裂となる。しかし、「実現可能性」をもたねばならぬ限り、体制維持の戦略にとりこまれねばならない。だから「悲願」として徹底的に阻碍されている間は、それは政治を動かす力として作動するが、佐藤・ニクソン声明として時間表にくりいれられると、それは逆に支配を支える力として機能することになってしまう」という意味においてである。

（内山秀夫「『沖縄』を考える」『週刊読書人』（一九七〇・二・九）『民族の基層』（一九八三）三嶺書房所収 P 二一四）

(5) 新川明『反国家の兇区』（一九七二）現代評論社 P 六九

(6) B 52 撤去闘争などを通じて定着していったとされるスローガンで、政府の返還方式に反対して提示された復帰協等の「即時無条件全面返還」の主張等をさす。

(7) 新川『反国家の兇区』P 六五

- (8) 新川『反国家の兇区』P三〇四
- (9) 新川明「差別告発」から『反逆』の持続へ―それは国家幻想を打ち破るところから始まる―『朝日ジャーナル』(一九七一・七・二)P一四 『反国家の兇区』所収
- (10) 一九六九年一〇月、当間重剛・山里永古・真栄田義見・崎間敏勝ら〈沖繩人の沖繩をつくる会〉のメンバーによって組織された政党
- (11) 『拒否の思想』と沖繩闘争(座談会)大城昌夫発言『朝日ジャーナル』(一九七〇・一一・二九)P一〇〇
- (12) 新川「差別告発」から『反逆』の持続へ『朝日ジャーナル』(一九七二・七・二)P一六
- (13) 「沖繩返還と日本国憲法」(誌上憲法公聴会)新川明発言『世界』(一九七二・六)P一一三
- (14) 新川によれば、沖繩人にとっての「ウフヤマトウ」とは、「実在する日本国そのものではなく、二百数十年にわたって現実には権力をふるい、置県処分のもと依然として横暴のかぎりをつくすヤマトウヤマトウンチュの専横という目前の現実をこえてイメージされる楽土の謂」にはかならないという。
- (新川明「幻想としての〈日本〉」『反国家の兇区』P二六)
- (15) 「差意識」とは、もともと、東江平之が「沖繩人の意識構造の研究」(琉球大学『人文社会科学研究所』第1号)のなかで使用した概念だが、新川は、これを「文化」思想上の問題を考える上での『核心』として捉え、「日本とのかかわりにおいて、〈国家としての日本〉を撃つ存在としての沖繩を考える場合に、重要な手がかりを提示している」と考えた。(新川明「幻像としての〈日本〉」『中央公論』(一九七二・九)P二四三 『反国家の兇区』所収・「沖繩と70年代」『沖繩タイムズ』(一九七〇・七・一四)『反国家の兇区』P七九)
- (16) 新川『反国家の兇区』P八一
- 新崎盛暉はこのような「反復帰」思想の胚胎を中屋幸吉の「日本人というにはあまりにオキナワ的なボク」という発想にみている。(中屋幸吉遺稿集『名前よ立って歩け―沖繩戦後世代の軌跡』一九六二年九月一〇日の

日誌部分)

- (17) 新川「沖繩と70年代」『沖繩タイムズ』(一九七〇・七・一四)
- (18) 『「拒否の思想」と沖繩闘争』(座談会) 新川明発言『朝日ジャーナル』(一九七〇・一一・二九) P 一〇〇
・新川明「憲法幻想」の破砕『現代の眼』(一九七〇・一一) P 三三 『反国家の兇区』所収
- 新川は「本土と沖繩の連帯」という当時氾濫していた言葉について、「相互の独自性を頑固に守りつつ、なお基底の方で相互の信頼関係を失わない、強固と柔軟」によって成り立つ概念として考えるのです。そのように考えることによって、すでに空疎なスローガン化したその言葉に、本来の生命力と創造力をよみがえらせたいと考えるのです」と述べている。(新川『反国家の兇区』P 四二)
- (19) 新川『反国家の兇区』(一九七二) 現代評論社 P 八〇・八一
- (20) 吉本はこのことを実証するため、日本国家における天皇位の世襲大嘗祭の構造と、沖繩の間得大君の継承祭儀の威力のふきこみ方を比較検討した(吉本隆明「南島の継承儀式について―「沖繩」と「日本」の根底を結ぶもの」『敗北の構造』(一九七二) 弓立社)
- (21) 吉本隆明「異族の論理」『情況』(一九六九) 河出書房新社 P 二〇一
- (22) 吉本「異族の論理」『情況』(一九六九) P 二〇二
- (23) 吉本「世界―民族―国家」空間と沖繩」『敗北の構造』(一九七二) P 四二三
- (24) 吉本「南島の継承儀式について―「沖繩」と「日本」の根底を結ぶもの」『敗北の構造』(一九七二) P 一八八・一九六
- (25) 吉本「世界―民族―国家」空間と沖繩」『敗北の構造』(一九七二) 弓立社 P 四二八
- (26) 新崎「戦後沖繩史」(一九七六) 日本評論社 P 三二三
- (27) 新川『反国家の兇区』(一九七二) P 四四

②⑧比屋根薫は「吉本の『異族論』と島尾敏雄の『ヤポネシア論』はペアになって、全共闘世代の批評家たちが国家を相対化していく視点にやはり受け継がれている」と指摘している。（『『ヤポネシア論』と沖縄―思想的な意味を問う―』〈座談会〉『新沖縄文学』71号（一九八七春）『発言・沖縄の戦後五〇年』（一九九五）ひるぎ社所収

②⑨「それぞれの南島論」〈パネルディスカッション〉（吉本発言）『琉球弧の喚起力と南島論』（一九八九）河出書房新社P八四

③⑩中野好夫・新崎盛暉『沖縄戦後史』（一九七六）岩波新書P二〇九

③⑪西里喜行「近代沖縄の課題と『差別問題』（覚え書）」「文化評論」（一九七一・九）P二五

③⑫新里恵二「『明治百年』と沖縄の近代史」「文化評論」（一九六八・十一）P七一・七二

謝花らの運動は、伊波普猷らの「沖縄学」とその啓蒙運動によって「文化的側面」において継承され、他方、「政治的側面」においては、大正末年から昭和にかけての労働者、農民の社会主義運動によって継承されたとし、謝花―伊波―徳田―瀬長という流れで、「ねづよい抵抗の伝統」が当時の革新勢力に引き継がれているという主張である。

③⑬このような、「抵抗運動」としての謝花らの「自由民権運動」のホコ先は、天皇制政府の差別政策へ向けられたばかりでなく、沖縄内部の旧支配層へも向けられなければならないとしたとする。（西里喜行「近代沖縄の課題と『差別問題』（覚え書）」「文化評論」（一九七一・九）P二六）この点については、大田昌秀も「私が謝花を評価したのは、それまでは、沖縄でみられる諸悪の根源はすべて、本土の側つまり外来者の責任だとみる発想が強かったのを、「敵」は地元にもいるんだということを、民衆の眼前に暴露した点です」という発言をしている。（「謝花昇―その生涯が語るもの」（座談会）大田昌秀発言『世界』（一九七二・二）P二二）これらの見解は、謝花が沖縄に「階級意識」を初めて導入したという点で一致している。

34) 新里恵二「沖繩近代史の諸問題」『文化評論』（一九七二・十二）P一六〇・「謝花昇―その生涯が語るもの」

新里恵二発言『世界』（一九七二・二）P一一

35) 「謝花昇―その生涯が語るもの」新里恵二発言『世界』（一九七二・二）P一二

36) 筆者は別稿にてこの時期の沖繩歴史研究の問題点について(1)「沖繩問題」との関係(2)「地方史」的視点という側面からとりあげた。ここでは触れることはできないので合わせて参照していただきたい。(拙稿「沖繩学・沖繩研究の動向(歴史学)」―沖繩関係学を考えるために―『沖繩関係学研究会論集』（一九九五）沖繩関係学研究会P五八）

37) 新川明「沖繩の思想課題とは何か」『物呉ゆすどー沖繩解放への視角』沖繩研究会編（一九七〇）田畑書店P三二

38) 「『拒否の思想』と沖繩闘争」新川明発言『朝日ジャーナル』（一九七〇・一一・二九）P九十八

39) 新川明「『差別告発』から『反逆』の持続へ」『朝日ジャーナル』（一九七二・七・二）P十五

40) 新川明「沖繩と70年代」『沖繩タイムス』（一九七〇・七・一四）

41) この点に関して我部政男は「従来この謝花の叫びは今日の自治権拡大闘争としての『国政参加』をかさねあわせて主張されてきた。（中略）たしかに、日米共同声明路線にそった『七二年施政権返還』と一セットで国政参加が政府の側より、提示されない段階において、謝花民権には抵抗の論理が貫かれていた。ところが、国政参加が積極的に政府の手で推進され、政府の意思を一方的に、沖繩に押しつけるパイプの役割を果たす危険性が明かになってくると、復帰運動における日本国家志向の発想の論理が批判されだされる」と指摘している。

（我部「謝花民権の可能性を考える―謝花昇の命日にちなんで―」『沖繩タイムス』（一九七〇・一〇・二九）『近代日本と沖繩』（一九八一）三一書房所収P六五

42) 新川明『異族と天皇の国家』（一九七三）二月社P二〇四

(43) 新川明『琉球処分以後―下』P二九

(44) 新川明「〈復帰〉思想の葬送―謝花昇論ノート」『新沖縄文学』（一九七〇・一二）P七九『反国家の兇区』

（一九七二）現代評論社所収

新川は、日本における自由民権運動が「いわゆる『国権のための民権』という発想によって、終局的には天皇制国家権力の確立に一定の役割を果たした」なかにあつて、中江兆民はその例外的存在であるという位置付けをしている。

（新川明「沖縄と70年代」『沖縄タイムス』一九七〇・七・一四）

(45) 大江健三郎「謝花昇と沖縄」『思想史を歩く 上』（一九七四）P一三

(46) 伊波普猷「中学時代の思い出」『伊波普猷選集 中巻』（一九六二）沖縄タイムス社P一七七

(47) 新川『琉球処分以後 下』P三〇

(48) 新川『異族と天皇の国家』P二二九

(49) 新川『異族と天皇の国家』P二三〇

(50) 新川『琉球処分以後 下』P三〇

(51) 新川『琉球処分以後 下』P三七

(52) 新川『琉球処分以後 下』P五

(53) 新川『異族と天皇の国家』P二〇七・二〇八

(54) 新川『異族と天皇の国家』P二二三・二二四

(55) 新川『異族と天皇の国家』P二一九

(56) 新川『異族と天皇の国家』P二二七

(57) 新川『異族と天皇の国家』P二八〇

58) 新川『異族と天皇の国家』P二七九・二八〇

59) 新川は謝花の参政権運動を「農工銀行経営を自派に有利な方向ですすめる態勢をととのえ、経済面における勢力確保に一定の見通し」を付けた状態で、「間髪を入れず政治的な地歩の確保を急がなければならないため、土地制度の根本に目を向けるいとまもなく、時には旧支配層の大物とも談合しながら性急に」取り組んだものとしたのである。(新川明『琉球処分以後 下』P六〇)

60) 新川『異族と天皇の国家』P二八二

61) 新川は謝花民権が挫折した原因について次のような点をあげている。まず第一に、参政権運動が「全くの『力手形』」に終わってしまい、期待どおりに実現しなかったこと。さらに、「沖繩俱樂部」の事業として起こした「南陽社」が「権力と政敵(旧支配層)の露骨な営業妨害で窮迫して」資金的に行き詰まってしまったこと。そして、「沖繩俱樂部」に集まった人たちに、論敵『琉球新報』と論争して、これを理論的に論破していただくの人材に恵まれなかったという弱点があったこと。そして、決定的にとどめをさしたのは、農工銀行の役員選挙における敗北であったとしている。従来、謝花等が、なぜ農工銀行の重役定員数の改正案を突然提案したのかということについては、必ずしも明確にされてこなかった。新川はこの問題について、「郡部派の利益と優位を守るために編み出された戦術」であり、「同銀行の経営を首里・那覇連合の資産者ならびに権力の恣意から守り、郡部農民層の立場で運営する方策として」正当な提案であったと評価する一方、「その構想を大衆化することなく、いきなり株主総会で奇襲作戦に出る道をとらせた」という点での「組織的な弱体と運動理念の弱さ」を指摘している。そしてこの結果、資力にものをいわせる連合派に「多数派工作」で破れ、「あっけない運動の終局」をむかえたとするのである。(新川明『異族と天皇の国家』P二八八・二九三)

62) 新川『異族と天皇の国家』P二二六

63) 新川『反国家の兇区』P一二二

(64) 「日本国家となぜ同化し得ないか」 (座談会) 新川明発言『中央公論』(一九七二・六) P 八三

(65) 新川『反国家の兇区』P 一二〇

(66) 新川「狂気」もて撃たしめよ」『現代の眼』(一九七二・八) 現代評論社 P 一〇一

(67) 新川「狂気」もて撃たしめよ」『現代の眼』(一九七二・八) P 一〇四

(68) 新川『反国家の兇区』P 三二四

四 「復帰」後、そして今後

一九七二年の日本「復帰」後、政治意識をダイレクトに持ち込まずに実証的に謝花民権を再検討していかうという研究がでてきた。本稿ではこれまで、政治意識がダイレクトに反映してきたことにこそ謝花論の特徴があるということを描いてきたが、謝花民権を実証的に研究しようとする動きは、このような意味での謝花論からの脱却をはかろうとしたものと考えられる。(1)

「復帰」という「世替り」のなかで謝花論が盛んに叫ばれる時期がすぎ、謝花民権を冷静な眼で再考しようという動きのなかで、史料面でも、謝花の自筆履歴書や、『中央農事報』に掲載された論文など、謝花研究に新たな進展を期待できる材料が発見された。(2)

田里修は発見されたこれらの論文(「砂糖消費税法案に対する調査」『中央農事報』(一九〇一・三・二〇)と「農工銀行と産業組合」『中央農事報』(一九〇一・四・二〇))とともに、謝花の農

科大学卒業論文「讃岐国糖業実況及び其改良策」や『沖縄糖業論』（一八九六・六）の内容の検討を行ない、そこから、謝花にとっての「栄光」は初の高等官になったことでも県技師になったことでもなく、「近代沖縄史の上で初めて、沖縄の未来を、沖縄の農業を語る、近代農学という学問の上に立って語った、ということにある」という結論を引き出した。つまり、謝花はどのような立場にあっても、一貫して糖業という問題を通して沖縄農民の「土着の念慮」⁽³⁾を論じ、沖縄の振興策を模索していたのであり、そこに「民権運動」の先駆者とは異なる謝花の側面Ⅱ「近代沖縄の思想」の先駆者としての謝花像を見いだしたのである。そして、そのような謝花の「挫折」は、「沖縄Ⅱ糖業」と無縁の場所であった山口県への赴任にあるとする。学生時分から研究してきた糖業との断絶は、謝花にとって死に等しいものであり、謝花を絶望へ至らせたのではないかというのである。⁽⁴⁾

このような田里の「謝花論」は、全体を通して、謝花の農業技術者・研究者としての側面を重視したものになっている。確かに、これまで謝花は「民権運動家」として取り上げられ、謝花が当時の沖縄農業の近代化に及ぼした影響などの面は看過されてきた。しかし、謝花の糖業研究という点を重視するあまり、沖縄社会内部の対立関係を謝花論の背景に押しやってしまうことになることや行き過ぎの感がある。

前章までみてきたように、「復帰」の際の謝花民権をめぐる論争は、イデオロギー過剰な方法論に

引きずられたものであり、「復帰」をめぐる政治的対立の投影だったということができる。しかし、謝花民権が、自らの政治的主張に引きつけて評価される傾向が強かったと言うことを簡単に批判することはできない。それは、明治期に謝花民権が直面していた問題が、現代の沖縄社会においても解決されずに残っていることから、各研究者の置かれた立場と、謝花民権評価の在り方が切り離しにくいものになっていた側面があると思われるからである。

謝花民権以来、今日につながる問題とは何か。まず第一点は沖縄の近代化と日本への同化の関係である。この問題は近代国民国家の統一過程において、いかにして沖縄の独自性を守るか、という沖縄のアイデンティティーの問題に絡んでくる。第二点はそれと関連して、沖縄における自治とはどうあるべきかという問題である。すなわち、沖縄は日本国家の中に入って（国政参加をして）様々な面での「本土並み」「格差是正」を求めるのか、または、国家の内部において独自性を主張するのか、それとも日本の国家の枠組みそのものと対立するのか、という複雑に絡み合った問題である。これらの問題が「琉球処分」以降、「謝花民権」、「日本復帰」、そして現在まで引き継いできてしまっているところに、政治意識反映型の謝花論が激しく展開される要因があったと思われる。

最後に、筆者自身が謝花民権をどう捉え、今後どのような視点から取り組んでいこうとするのか、四点ほど提示したい。

まず一点は、沖縄の農政において謝花が果たした役割についての検討ということである。やはり、謝花民権は抵抗者としての謝花像だけでは捉えきれない。謝花は農政指導を通して沖縄社会をどのように変えていこうとしたのか、謝花は大学でどのような農学を学び、その成果を沖縄に持ち込もうとしたのか、それが奈良原知事の農業政策と対立する原因となったのかどうか、という点に着目したい。⁽⁵⁾ 先述したように、謝花本人によって書かれたものはほとんど現存してはいないが、謝花の農業関係の論文、又は、当時の農政関係の統計史料等からある程度この点について浮き彫りにすることが可能なのではないかと思う。その際、在京中に最も思想的に影響を受けたであろう、横井時敬の農学及び「本土」における活動は、沖縄における謝花の活動を見る上での重要な手掛かりになると考える。

二点目は、謝花と奈良原知事の対立点とされる杣山の開墾・払い下げ問題についての再検討である。明治二〇年代から三〇年代にかけて起こった杣山問題は、「本土」における明治一〇年代の入会地の問題と共通の問題を抱えている。したがって、両者を明治政府の全般的な土地政策との関係から比較検討することが有効だと思われるが、沖縄の杣山問題については、開墾・払い下げともかなり露骨な土族対策として断行されたところに、農民出身の謝花と旧土族層との間に対立が生じる、一つの原因があたのではないかと考える。

第三点は、これまで、謝花の敵として、または歴代の知事のなかでも最も専制的な政治を行なった「悪役」として記述されてきた、奈良原繁の県政についての再検討である。奈良原は確かに薩摩出身

の政治家として藩閥勢力という後ろ盾の下、絶大な力をもって沖縄県政に取り組むことができた。しかし、そうではあっても元来奈良原は明治政府内における一地方官であり、明治政府の对外政策の枠内で軍事上の要地である沖縄の近代化を強権的に図るという使命を負って沖縄に赴任したものだと思われる。このような視点から奈良原県政を再検討し、多少なりとも内実を明らかにすることができれば、これまでのような「善玉悪玉」的記述を脱することができないだろうか。

四点目としては、沖縄における謝花民権の時期を「自由民権運動」との比較においてどう捉えるか、という問題である。

謝花民権の時期（明治三〇年代）というのは、いわゆる「本土」の自由民権運動は、消滅してしまっただものもあり、別な形の運動へと継続していったものもある。このような時期的な差を考慮しても、運動の構想面からみても、謝花民権を自由民権運動と規定することは困難であろう。しかし、「本土」の自由民権運動を、「建国期」（＝近代国家建設期）に「国家構想」をもって闘われた民権運動という側面に焦点をあてて捉え返すとどうなるだろうか。この場合、謝花らの運動は沖縄の「建県期」に「沖縄県人」としての主体性をもって「県政構想」をもってなされた民権運動だという捉え方が可能になってくる。

ここでいう「建県期」とは、他府県人による一方的な統治の時期をすぎ、「ウチナーンチュ（沖縄人）」が日本国家のなかの「沖縄県人」として主体性を持って県政に参加しはじめた時期、ということ

とである。この「建県期」と、従来使用されてきた「初期県政期」の示す内容とは大きく異なる。「初期県政期」は、一連の「琉球処分」という形で沖縄県が設置され、中央政府から派遣された他府県人によって県庁がほとんど独占され、「旧慣温存」という特殊な形を取りながら、中央集権国家たる大日本帝国の一地方県として組み込まれるべく制度が整えられていった時期とされる。⁽⁶⁾それに対して明治三〇年代の奈良原県政の時期は、公同会事件をひとつの契機として「ウチナーンチュ（沖縄人）」が「沖縄県人」として、主体性を持って県政に参加・すり込みをはかろうとしはじめた時期と捉えている。⁽⁷⁾

このような分析視角に立って沖縄の「建県期」の政治動向をみてみると、これまでのような、 $\langle$ 「官」 $\parallel$ 「民」 $\rangle$ （奈良原に代表される） $\langle$ 県庁＋旧支配層 $\rangle$ 対 $\langle$ 「民」 $\parallel$ 「抵抗者」 $\parallel$ 謝花民権 $\rangle$ という二極対立構造で捉えることは不可能だと思われる。明治二〇年代から三〇年代にかけては、土地整理事業が開始され、制度としての県庁の優位が確立している以上、仮に県庁、旧支配層、謝花民権という三つのグループを想定しても、政権掌握をめぐる対立・競合関係という捉え方はできない。しかし、開墾政策などのすすめ方、県の経済に大きな影響力をもつ農工銀行の実権掌握などをめぐり、三つのグループ間にはこれまでにいわれてきた以上の流動性が見いだせるのではないだろうか。いずれにしても「権力分有」という側面から謝花民権を捉えることも可能ではないかと思われる。

以上のような視角から謝花民権を新ためて位置付けることが課題となるが、杣山の乱開発から生じた自然破壊の問題、自治権の獲得、沖縄のアイデンティティーの問題など、謝花民権が直面した問題は、ほとんど現在に置き換えて論じうるものである。その意味で、今後も謝花民権の研究を通して、現在の沖縄を理解する手掛かりを探っていきたい。

(1) しかしだからといって、現在、政治意識を含めた謝花論というものが全く無意味なものになったとは考えられない。現在もおおくの人々が謝花民権を民権運動のシンボルとして捉えていることは否定し得ないし、また現段階においてそのようなシンボルとしての謝花民権を実証性が低いという理由からのみ否定することはあまり意味のないことのように思われる。

(2) 「謝花昇の論文二編見つかる」『琉球新報』（一九九〇・二・一〇）田里修・伊佐慎一「謝花昇の新史料」『琉球新報』（一九九〇・一二・四・六）

(3) 謝花昇「農工銀行と産業組合」『中央農事報』（一九〇一・四・二〇）P一五

(4) 田里修「東平風謝花」栄光と挫折『新琉球史』P一三五～一三七 田里は謝花においては「糖業の振興」沖縄の振興と土着の念慮であったとする

(5) 謝花は沖縄の近代化を推進するという点では奈良原施政に同調しつつも、杣山問題については農学者・農業技師としての立場から、沖縄の生態系破壊に通じるような杣山の乱開発については反対し、奈良原県政と鋭く対立していたのではないかと思われる。

(6) 金城正篤『沖縄県史 2 政治』P一四九

(7)このような「建県期」という捉え方は、坂野潤治の研究から示唆を受けている。坂野は明治「建国期」の政治動向を捉える際に、明治六年政変から明治十四年政変までの時期を「建国期」（近代国家建設期）とし、明治立憲体制への過渡期と規定している。そしてこの時期についての研究が陥りがちであった「官」と「民」（「政府」対「反政府」）という二分法的な捉え方を避け、政治対立の多様性、流動性に着目し、大久保Ⅱ大隈派・木戸Ⅱ井上派・板垣Ⅱ民権派・西郷Ⅱ征韓派・島津Ⅱ旧藩主層のいずれのグループにも政権掌握もしくは分有の可能性があったという立場に立って検討を加え、新しい視野を提供した。

（坂野潤治「征韓論争後の『内地派』と『外征派』」『近代日本研究3』一九八一 「明治立憲制の三つの選択—超然主義、政党内閣主義、議会主義—」『思想』一九八六・一二

付記：本稿は、一九九三年度に慶應義塾大学大学院法学研究科に提出した修士論文の一部、および一九九四年六月二五日に行われた三田史学会においての口頭発表の内容をもとに成稿したものです。

本稿作成にあたっては、内山秀夫先生、坂井達朗先生、我部政男先生をはじめ、実に多くの方々からご指導を賜りました。また川畑恵氏からは多岐にわたるご教示を受けました。お世話になった皆様にこの場をかりて心よりお礼申し上げます。文中、敬称はすべて省略させていただきました。

〈謝花民権関係文献—年代順〉

謝花昇、一八九一、「讃岐国糖業実況及び其改良政策」、「義人謝花昇伝」（初版）付録卒業論文

- 謝花昇、一八九六、「沖繩糖業論」
- 謝花昇、一九〇一／三／二〇、「砂糖消費税法案に対する調査」、「中央農事報」
- 謝花昇、一九〇一／四／二〇、「農工銀行と産業組合」、「中央農事報」
- 朝日新聞通信部、一九二八、『県政物語』（沖繩県）、世界社
- 湧上聾人、一九二九、「沖繩唯一の民権思想家謝花昇の憤死」、「沖繩救済論集」、改造の沖繩社
- 当山正堅、一九三一、「新沖繩建設の功労者故農学士謝花昇氏の略伝」、「東風平小学校創立五十周年記念誌」
- 太田朝敷、一九三二、『県政五十年』、おきなわ社
- 親泊康永、一九三五、『義人謝花昇伝』、新興社
- ★ 一九三七、『民権思想家謝花昇の憤死』、『島尻郡誌』
- 中村信義、一九三九、「謝花昇とトーマス・ベーン」、「琉球」六、在米沖繩県人会
- ★ 一九四〇、『俊傑・謝花昇』、『文化沖繩』一一三
- 大里康永、一九四八／四、「義人謝花昇とその伝記」、「青年沖繩」一卷四号、沖繩青年同盟
- 池宮城秀意、一九四九／二、「沖繩の義人謝花昇伝戯曲」、「人民文化」（二月号付録）
- 金城時男、一九五〇、「当山久三小伝」、『おきなわ』二五、東京おきなわ社
- 大里康永、一九五一／七、「民族解放の戦士 謝花昇」、『おきなわ』二卷六号、東京おきなわ社
- 湧川清栄、一九五三、『当山久三―沖繩現代史の一節』、在ハワイ金武村有志主催故当山久三氏伝記編集会
- 湧川清栄、一九五三、「先覚者当山久三を偲ぶ」、『おきなわ』一三、東京おきなわ社
- 安次富松蔵、一九五三、「当山久三氏と大城孝蔵氏」、『おきなわ』一七、東京おきなわ社
- 比嘉康雄、一九五三、「弟の見た当山久三」、『おきなわ』二五、東京おきなわ社
- 山田有幹、一九五一、「謝花昇」、「うるま新報」

仲原善忠、一九五三、「沖縄県の政治」、『琉球の歴史(下)』、琉球文教図書

J・H・カー、一九五六、『琉球の歴史』、琉球列島米国民政府

饒平名智太郎、一九五六、『沖縄』、三一書房

大里康永、一九五七、『謝花昇伝』、期成社

遠山茂樹、一九五七/一、「明治初年の琉球問題」、『歴史評論』

比嘉春潮、一九五九、「杣山処分と謝花昇」、『比嘉春潮全集』、沖縄タイムス社

★ 一九五九/八/二七、九/九、「沖縄の夜明け前―先達を語る」(座談会)、『沖縄タイムス』

伊波普猷、一九六一、「中学時代の思い出」、『伊波普猷選集』、沖縄タイムス社

比嘉春潮・霜多正次・新里恵二、一九六三、「自由民権のたたかい」、『沖縄』、岩波新書

吉原公一郎、一九六三、「沖縄の思想―告発の原点」、『沖縄―本土復帰の幻想』、三一書房

佐次田勉、一九六三、「沖縄における自由民権運動」、『日本史研究』(六六号)

仲泊良夫、一九六四、「琉球偉人伝 自由民権運動の指導者謝花昇」、『守礼の光』(三、六月号) 米国民政府

中今信、一九六四/一/三、「私のすすめたい本 謝花昇伝」、『沖縄タイムス』

川平朝申、一九六四/一九六五「郷土の歩み―若い人々のための琉球歴史」、『今日の琉球』

井上清、一九六五、『日本の歴史』、岩波書店

森田俊男、一九六六、「科学的な沖縄・日本・世界像を」、『アメリカの沖縄教育政策』、明治図書

森田俊男、一九六六、「自由民権運動と民主主義教育の芽」、『沖縄問題と国民教育の創造』、明治図書

森田俊男、一九六六/四、「皇民化の差別教育に対する沖縄県民の歴史」、『国民教育研究所論稿』

★ 一九六六、『那覇市史―資料編第二卷上』、那覇市史編集委員会

太田昌秀、一九六七、『謝花昇と民権運動』、『沖縄の民衆意識』、弘文堂新社

琉球政府、一九六七、『沖縄県史―第16巻資料編六新聞集成』

宮城栄昌、一九六八、『土地整理とその影響』、『沖縄の歴史』、NHKブックス

田港朝和、一九六八/一〇/二三、『民権運動―近代史の変革運動』、掌握の試み・近代史研究の意義と課題、

『沖縄タイムス』

金城弘子、一九六九、『沖縄に於ける自由民権運動』、『沖縄歴史研究』（七号）、沖縄歴史研究会

新里金福、一九六九、『謝花昇』、『沖縄の百年（二巻）人物編』、太平出版社

新里金福、一九六九、『謝花昇と自由民権運動』、『沖縄の百年（二巻）歴史編』、太平出版社

大里康永、一九六九、『沖縄の自由民権運動―先駆者謝花昇の思想と行動』、太平出版社

大里康永、一九六九、『平良新助伝』

安仁屋政昭、一九六九、『沖縄の近代をささえた人びと 差別と収奪に抗して』、『文化評論』、日本共産党

★ 一九六九/一一/一、『沖縄の自由民権運動 謝花昇の思想と行動』についての書評―読書、『琉

球新報』

大田昌秀、一九六九、『国政参加の意義』、『醜い日本人』、サイマル出版

上条宏之、一九六九/一一/一七、『沖縄の自由民権運動 謝花昇の思想と行動』についての書評、『信濃毎日

新聞』

我部政男、一九六九/一一/二二・二三、『謝花昇につかれた大里康永氏』、『琉球新報』

藤島宇内、一九六九/一一/二九、『沖縄の自由民権運動 謝花昇の思想と行動』についての書評、『図書新聞』

新里恵二、一九六九/一二/一四、『先駆者謝花昇の悲惨な生涯 / 本・批評と紹介』、『朝日ジャーナル』

津野創一、一九六九/一二/一六、『闘う沖縄の歴史―読書』、『エコノミスト』

太田昌秀、一九六九/一二/一八、『六九一冊の本』、『朝日新聞』

永積安明、一九六九／一二／一八、「沖縄の苦悩―復帰とは何か―」、『朝日新聞』

大江健三郎、一九六九／一二、「内なる琉球処分」、『世界』

色川大吉、一九七〇／一／三、「えつらんしつ」、『朝日新聞』

木下順二、一九七〇／一／二三、「謝花昇の目―沖縄の矛盾をみつめる生涯」、『朝日新聞』

一泉知永、一九七〇／一／一五、『沖縄の自由民権運動 謝花昇の思想と行動』についての書評、『明大新聞』、

明治大学新聞部

鈴木真幸、一九七〇／一／二六、「先駆者の抵抗の生涯―読書」、『赤旗』

橋川文三、一九七〇／二、「読書ノート」、『展望』、筑摩書房

越来太郎、一九七〇／四／六、『沖縄の自由民権運動 謝花昇の思想と行動』についての書評、『週間アンボ』、

声なき市民の会

伊波南哲、一九七〇／四／二七、『沖縄の自由民権運動 謝花昇の思想と行動』についての書評、『読書の友』、

日本共産党

★ 一九七〇、『沖縄県史―第二巻政治』、琉球政府沖縄県史編纂委員会

新川明、一九七〇／七／一四、「思想史の空白（沖縄と七十年代）」、『沖縄タイムス』

南海清、一九七〇／八／一五、「近代沖縄の歴史から何を学ぶか―新川『記者』のいわゆる『自立思想』につい

て」、『人民』四四一号、沖縄人民党

佐次田勉、一九七〇／九／五、「歴史事業と清算主義」、『人民』444号、沖縄人民党

仲地哲夫、一九七〇／九／八、『沖縄タイムス』

新川明、一九七〇／九／二九・三〇 一〇／一・三、「近代史研究の一視点―謝花昇・伊波普猷をめぐって」、

『沖縄タイムス』

我部政男、一九七〇／一〇／二九、「謝花民権の可能性を考える」、『沖縄タイムス』

吉原公一郎、一九七〇、「沖縄の思想家謝花昇」、『月刊社会党』（八・九・一〇・一一・一二号）

安仁屋政昭・他、沖縄歴史研究会編、一九七〇、『近代沖縄の歴史と民衆』、至言社

我部政男、一九七〇／一二、「謝花民権と国政参加―義人謝花昇伝復刊の今日的意義を中心に」、『展望』、筑

摩書房

★ 一九七〇／一二／二二夕、「沖縄解放の先駆者『謝花昇伝』」、『琉球新報』

新川明、一九七〇／一二、「〈復帰〉思想の葬送―謝花昇ノート」、『新沖縄文学』（一八号）

『謝花昇』、在北米沖縄人による謝花昇生誕百年記念パンフレット、（那覇市所蔵）

田港朝昭、一九七〇、「自治の展開」、『沖縄県史（第二巻・政治）』琉球政府

★ 一九七二／一／二二、『人民』

★ 一九七二／一／二三、『新春対談』、『赤旗』

大道進、一九七二／一／二三・三〇、「敗北の思想『復帰論』」、『人民』（四六四・四六五号）、沖縄人民党

新川明、一九七二／二、「反骨の系譜」、『沖縄タイムス』

大江健三郎・新里恵二・大江志乃夫・大田昌秀、一九七二／二、「謝花昇―その生涯が語るもの」（座談会）、

『世界』、岩波書店

登野拓治、一九七二／二／二〇・二七、「政党否定と『復帰論』』、『人民』（四六八・四六九号）、沖縄人民党

古波津英興、一九七二／三、「沖縄闘争の原点謝花昇論」、『破防法研究』（一〇号）

田港朝和、一九七二、「謝花昇年譜草稿」、『歴史と現代』

吉原公一郎、一九七二／五、「もう一つの歴史」、『海』

儀部・来間・安仁屋、一九七一、「自由民権のたたかい」、『戦後沖縄の歴史』、日本青年出版社

比嘉春潮、一九七二、「杣山処分と謝花昇」、「新稿沖縄の歴史」、三一書房

牧瀬恒二、一九七二、「沖縄の自由民権運動」、「日本史の再発見としての沖縄の歴史」、汐文社

渡辺惇、一九七二／三／五、「一林業技術者のみた謝花昇像」、「林業経済」（二六九／二七一）林業経済研究

所

新川明・大城立裕・他、一九七二／六、〈座談会〉、『世界』

新里恵二、一九七二／六／一一、『沖縄タイムス』

新里恵二、一九七二／六／一九・二六、「歴史から見た沖縄の民衆」、「人民」（四八五・四八六号）、沖縄人民党

新里恵二・他、一九七二／七、「シンポジウム―沖縄問題とイデオロギー論争」、「前衛」

松永昌三、一九七一、「沖縄の民権運動」、「近代日本思想史の基礎知識」、有斐閣

西岡虎之助・鹿野政直、一九七一、「沖縄の民権運動」、「日本近代史」、筑摩書房

新川明、一九七二／八、「狂気もて撃たしめよ―謝花昇の虚像と実像」、「現代の眼」、現代評論社

我部政男、一九七二／八、「義人謝花昇伝について」、「新沖縄文学」（二〇号）

西里喜行、一九七二／九、「沖縄における反復帰運動とその周辺」、「民主文学」七〇号、新日本出版社

西里喜行、一九七二／九、「近代沖縄の課題と『差別』覚書」（特集―沖縄論の思想）、「文化評論一二一」、日

本共産党

新川明、一九七二／九、「幻想としての『日本』」、「中央公論」

松尾明、一九七二／九／二五、「生誕百六年によせて―謝花昇の業績しのぶ記念集会の開催を」、「人民」（四

九九号）、沖縄人民党

「先駆者の生涯描く―『謝花昇伝』（沖映）」、一九七二／九／二五、「人民」（四九九号）、沖縄人民党

城佐武郎、一九七二、「義人謝花昇伝」、沖映本館（映画台本）

渡辺惇・脇元裕嗣、「謝花昇と私たち・知られざる太陽―ある林業技術者の生涯を追う」、『さっぽろ林友』（一四四号）

四四号）

大里康永、一九七二／一〇／二、「伝記を書いた動機―労働者の話とその頃の私」、『人民』（五百号）、沖縄人民党

民党

吉原公一郎、一九七二／一〇／二、「熱闘（ちっとう）」、『人民』（五百号）、沖縄人民党

砂川栄、一九七二／一〇／二、「謝花昇と自由民権運動」、『人民』（五百号）、沖縄人民党

山本説子、一九七二／一〇／二、「謝花昇から学ぶもの―現実が提起する問題と関連して」、『人民』（五百号）、

沖縄人民党

池宮城秀意、一九七二／一〇／二、「謝花昇と私―戦後初上演の頃」、『人民』（五百号）、沖縄人民党

大城立裕、一九七二／一〇／二、「謝花昇と私―記念切手の発行」、『人民』（五百号）、沖縄人民党

★ 一九七二／一〇／二、「記念顕彰を―野坂共産党議長の提案」、『人民』（五百号）、沖縄人民党

謝花清三郎、一九七二／一〇／二、「謝花昇のこと」、『人民』（五百号）、沖縄人民党

新川明、一九七二、「反国家の兇区」、現代評論社

新里恵二、一九七二／一二、「沖縄近代史の諸問題」、『文化評論』（二二四号）、日本共産党

松尾章一、一九七二、「沖縄の自由民権運動 謝花昇の思想と行動」についての書評、『歴史評論』（二五九号）

謝花昇をしのぶ会、一九七二、「民権運動の先駆者謝花昇をしのぶ」

太田昌秀、一九七二、「近代沖縄の政治構造」、勁草書房

湧川清栄、一九七二、「沖縄民権の挫折と展開―当山久三」、太平出版社

笹森儀助、一九七三、「沖縄私立勸業会における謝花昇の演説『甘しょ敷地について』」「南島探険」、一九七三、

『日本庶民生活史料集成』（二巻）、三一書房

新川明、一九七三、『異族と天皇の国家―沖縄民衆史への試み』、二月社

比屋根照夫、一九七三／一二／十五、『思想のドラマ』『異族と天皇の国家』、『沖縄タイムス』

我部政男、一九七三／一二／二九、『新川明著『異族と天皇の国家』に寄せて』、『琉球新報』

新里金福、一九七四、『那覇市史―通史編第二巻近代史』、那覇市

大江健三郎、一九七四、『謝花昇と沖縄』、『思想史を歩く 上』、朝日選書

新里金福、一九七四／五、『中村十作と謝花昇』、『伝統と現代』(二七)

大城立裕、一九七五、『自治への動き』、『沖縄県史』

橋本義夫・他、一九七五／九／二九／三一、『自由民権運動はなぜ挫折した』(座談会)、『朝日新聞』

大里康永、一九七五／一〇／六／一四、『回想の『謝花昇伝』―執筆の内幕を語る』、『琉球新報』

知念政光、一九七五／一〇／一〇、『謝花昇と触れあった政治家』、『沖縄タイムス』

田港朝和、一九七六、『謝花昇年譜草稿』、『沖縄資料編集所紀要』(創刊号)

高良倉吉、一九七六、『謝花昇論の一資料をめぐる―『万朝報』記事から―』、『沖縄資料編集所紀要』(創刊号)

刊号

我部政男、一九七六、『謝花民権―沖縄の自由民権運動』、『岩波講座日本歴史月報一四』

新崎盛暉、一九七六、『沖縄現代史への証言(七)』『義人謝花昇伝』の背景―大里康永氏に聞く』、『新沖縄文学』(三二号)

学(三二号)

★ 一九七六、『東風平村史』、東風平村役所

小池喜孝、一九七六、『伝蔵と森蔵―自由民権とアイヌ連帯の記録』、現代史出版会

森田俊男、一九七六、『地域の理論』、『森田俊男教育論集第二巻』、民衆社

太田良博、一九七七、『異説・沖縄史(三)』『謝花昇伝』の虚像』、『新沖縄文学』(三四号)

太田良博、一九七七、「異説・沖繩史〈三〉」「謝花昇伝」の虚像(続)、『新沖繩文学』(三五号)

西里喜行、一九七七、「謝花昇と沖繩民権運動に関する一考察(一)」、『琉球大学教育学部紀要』(二二)

★一九七七、「自由民権運動」、『沖繩県史・一』、沖繩資料編集所

森田俊男、一九七七、「沖繩の自由民権運動を考える―謝花昇の活動を中心にして―」、沖繩史を記録する会

大峰林一、一九七八/八/三一、「謝花昇の新資料収集に当たって」、『琉球新報』

遠山茂樹、一九七九/一、「自由民権思想と現代」、『世界』

太田良博、一九七九、「異説沖繩史・杣山問題の真相」、『新沖繩文学』(41)

我部政男、一九七九/二/四、「大里康永自叙伝 自由への歩み連載を前に」、『沖繩タイムス』

大里康永、一九七九/二/六/四/二四、「自由への歩み わたしの自叙伝」、『沖繩タイムス』

浦崎康華、一九七九/四/二八/五/三、「大里康永氏の自叙伝『自由への歩み』の周辺」、『沖繩タイムス』

田里修、一九七九/六/二七/七/十一、「東風平・謝花再考」、『沖繩タイムス』

色川大吉、一九八〇/一〇/二四/二六、「自由民権百年に思う―岩波文化講演より」、『沖繩タイムス』

当銘直光、一九八〇、「東風平小学校創立百周年記念誌」、東風平小学校

大里康永、一九八一、「謝花昇をしのぶ」、『沖繩民衆史を歩く記録と発掘』(創刊号)

新崎盛暉・我部政男、一九八一、「憲法の周辺をめぐる―自由民権運動と沖繩」、『新沖繩文学』(四八)

色川大吉・比屋根照夫、一九八一/一/二七/二四、「自由民権百年―自由民権と現代」(対談)、『沖繩タイムス』

ムス

我部政男、一九八二/一一/一二/一三、タ、「民権百年 上―民権と南島」、『毎日新聞』

我部政男、一九八二/一一/二二、「自由民権百年―全国集会を迎えるに際して」、『沖繩タイムス』

新川明、一九八一、「琉球処分以後 上・下」、朝日選書(二七五・一七六)

西里喜行、一九八一、「謝花昇とその時代」、『論集・沖縄近代史』、沖縄時事出版沖縄史を記録する会、一九八

一、『沖縄民衆史を歩く』

☆ 一九八二／五／二二夕、「謝花昇の『辞職願』見つかる」、『沖縄タイムス』

大里康永、一九八二、『自由への歩み―わが思い出の記』、沖縄時事出版

知念善栄編、一九八三、『資料 農学士謝花昇』、東平風町役場

新崎盛暉、一九八三／二／七、『自由民権思想と沖縄』について、『沖縄タイムス』

田里修、一九八四／二一、『沖縄県における自由民権運動』、『歴史評論』(四一五)

田里修、一九八四、『謝花昇―帝国憲法下の参政権運動』、『住民と自治』(二六〇)

牧瀬恒二、一九八四、『沖縄の自由民権運動―謝花昇の参政権獲得運動』、『日本史の原点としての沖縄学』、本

邦書籍

内山秀夫、一九八七、『沖縄縣費第一回留学生』、『近代日本研究』(四巻)、慶応義塾福沢研究センター

田港朝和、一九八七、『謝花昇の活動に関する新聞記事目録』、『史料編集室紀要』(一二号)

田里修、一九八七／一〇／二九、『謝花昇八十年忌に寄せて』、『琉球新報』

森田俊男、一九八八、『個性としての地域・沖縄』、汐文社

金城正則、一九八九／九／一八、『人間 謝花昇を考える―村おこしコンサートから』、『琉球新報』

☆ 一九九〇／一一／一〇、『謝花昇の論文二編見つかる』、『琉球新報』

田里修・伊佐眞一、一九九〇／一二／四六、『謝花昇の新史料』、『琉球新報』

田里修、一九九一／一二／三三二／一六、『東風平謝花―栄光と挫折』、『琉球新報』

我部政男、一九九二／一〇／一七、『天空の秋晴へ大里康永先生』、『沖縄タイムス』

田里修、一九九二／一〇／一七、『追悼・大里康永氏』、『琉球新報』

★ 一九九一／一〇／二三、「大里康永氏と謝花昇」、「沖縄タイムス」

伊佐眞一・比屋根照夫、一九九二／九／一四～一七、「明治期の沖縄言論人」、「琉球新報」

高良倉吉・田里修、一九九二／一二、「新琉球史―近代・現代編」、琉球新報社

鹿野政直、一九九二、「沖縄の淵」、岩波書店

★ 一九九三／九／一四、「琉球新報創刊百年」、「琉球新報」

★ 一九九三／十一／三、「謝花昇記念館の復活運動」、「沖縄タイムス」

伊佐眞一、一九九三／一二／二四・二五、「沖縄近代史の沃野へ『太田朝敷選集』編集にあたって」、「琉球新報」

新城俊昭、一九九四／三、「高等学校 琉球・沖縄史」、沖縄県歴史教育研究会

田里修・浦崎栄徳 他、一九九四／八／六、「謝花昇シンポジウム東風平行政への提言」、「沖縄タイムス」

「謝花昇記念事業」、一九九五／五／八、「琉球新報」

◆ 一九九五年七月 大里作成

参考：「謝花昇関係文献資料」（一九七六） 沖縄史を記録する会

『自由民権運動研究文献目録』（沖縄）（一九八四）

「沖縄歴史関係主要論文目録」（一九七五） 沖縄県立図書館史料編集室

〈その他の参考文献―年代順〉

島袋邦、一九六三／一一、現代沖縄の政党及び政治、『人文社会科学科学研究1号』、琉球大学人文社会科学研究所
儀部景俊、一九六四／八、沖縄県の教育をめぐる情勢、『歴史地理教育九九』、河出書房新社

久場政彦 比嘉幹郎 大城立裕 外間正四郎 村上薫、一九六五／一一、沖縄は抗議する(現地座談会)、『現代の眼』、現代評論社

大城立裕、一九六七／一〇、『芥川賞』海を渡る、『月刊時事』

沖縄県民・本土にもの申す 〈街頭録音〉、一九六七／一〇、『月刊時事』

斉藤教策、一九六七／一〇、百万の里子、『月刊時事』

前原高校ホームルーム、一九六七／一〇、われら日本人、『月刊時事』

宮里政玄、一九六七／七／一六、核つき返還と復帰運動、『朝日ジャーナル』、朝日新聞社

中野好夫、一九六八／一、沖縄を考える、『文化評論76』、日本共産党

吉本隆明、一九六八／一二、異族の論理、『文芸』

砂川恵伸、一九六八／二、復帰問題の考え方、『人文社会科学科学研究 六号』、琉球大学人文社会科学研究所

大田昌秀、一九六八／二、沖縄の世論と新聞についての一考察、『人文社会科学科学研究六号』、琉球大学人文社会科学研究所

科学研究所

大城立裕、一九六八／四、沖縄人の本当の気持、『婦人公論』

吉本隆明、一九六八／一二、母制論、『共同幻想論』、河出書房新社

高橋実 新崎盛暉 袖井林二郎 岩垂寿喜男 飯島博光、一九六九／一〇／一九、本土から沖縄へ〈座談会〉返

還運動全史の虚妄をつく、『朝日ジャーナル』、朝日新聞社

新川明 川満信一 内原稔、一九六九／一一、安保と沖縄〈誌上座談会〉、『七十年沖縄の潮流』、沖縄タイムス社
外間守善、一九六九／一一、沖縄の主体性、『七十年沖縄の潮流』、沖縄タイムス社

- 仲宗根勇、一九六九／一一、憲法と沖縄、『七十年沖縄の潮流』、沖縄タイムス社
- 大浜信泉、一九六九／四、冷静な「沖縄返還論」を、『文芸春秋』
- 新崎盛輝、一九六九／五、沖縄は反安保の砦、『現代の眼』、現代評論社
- 日高六郎、いいだも、一九六九／五、戦後民主主義と沖縄解放、『現代の眼』、現代評論社
- 金城弘子、一九六九／九、沖縄における自由民権運動、『沖縄歴史研究7号』、沖縄歴史研究会
- 新崎盛輝、一九六九／九、思想としての沖縄、『現代の眼』、現代評論社
- 大田昌秀、一九六九、『醜い日本人』、サイマル出版
- 吉本隆明、一九七〇／九、南島論―家族・親族・国家の論理、『敗北の構造』、弓立社
- 中野好夫、一九七〇／一〇、欺瞞の三百議席、『世界二九九』、岩波書店
- 下地寛信、一九七〇／十一、沖縄に何が起ったか、『現代の眼』、現代評論社
- 霜多正治、永井潔、一九七〇／一一、文化問題としての沖縄、『文化評論一一〇』、日本共産党
- 新里恵二、一九七〇／一一、『琉球人』は訴える、『中央公論』、中央公論社
- 平恒次、一九七〇／一一、『琉球人』は訴える、『中央公論』、中央公論社
- 山本博昭、一九七〇／一一／二九、沖縄国政参加―儀式の結末、『朝日ジャーナル二二―四七』、朝日新聞社
- 知念栄喜、一九七〇／一二、聲の中の聲、『新沖縄文学』、沖縄タイムス社
- 大城立裕、一九七〇／一二、文化創造力の回復、『新沖縄文学』、沖縄タイムス社
- 珊瑚太郎、一九七〇／一二、非日本人的日本人として、『新沖縄文学』、沖縄タイムス社
- 仲曾根勇、一九七〇／一二、沖縄の遺書、『新沖縄文学』、沖縄タイムス社
- 新川明、一九七〇／一二〈復帰〉思想の葬送、『新沖縄文学』、沖縄タイムス社
- 大田昌秀、一九七〇／一二、沖縄の反体制運動研究覚え書き、『新沖縄文学』、沖縄タイムス社

由井晶子、一九七〇／五、沖繩―「日本化」に抗して、『月刊たいまつ八号』、たいまつ社
豊平良顕、一九七〇／五／一〇、「新沖繩学」のすすめ―祖国復帰と人間復帰、『朝日ジャーナル』、朝日新聞社

新里金福、一九七〇／五／三、沖繩解放―その歴史と現実―四・二八デーへの切なる提言、『朝日ジャーナル』、朝日新聞社

朝日新聞社

新里恵二、一九七〇、『沖繩史を考える』、勁草書房

谷川健一編、一九七〇、『沖繩の思想』、木耳社

吉原公一郎、一九七〇／八／一九七二／六、沖繩の思想家 謝花昇一七、『月刊社会党一六二―一七二』、日本社会党

日本社会党

河邑重光、一九七二／十二、トロツキストの「沖繩論」、『文化評論一二四』、日本共産党

大江健三郎 大江志乃夫 大田昌秀 新里恵二、一九七二／二、謝花昇―その生涯が語るもの〈座談会〉、『世界三〇七』、岩波書店

世界三〇七、岩波書店

吉原公一郎、一九七二／五、もう一つの歴史、『海』、中央公論社

大田昌秀、一九七二／六、沖繩の転機、『世界三〇七』、岩波書店

大城立裕、一九七二／六、挫折を憂える、『世界三〇七』、岩波書店

大江健三郎、一九七二／六、復帰拒否者を想像せよ、『世界三〇七』、岩波書店

小田実、一九七二／六、さて、どうするか、『世界三〇七』、岩波書店

潮見俊隆、一九七二／六、復帰不安と憲法感覚、『世界三〇七』、岩波書店

瀬長亀次郎 上田耕一郎 新里恵二 他、一九七二／七、シンポジウム 沖繩問題とイデオロギー闘争、『前衛三二六』、日本共産党

上原康助 西銘順治、一九七二／七／二、沖繩の肉声・沖繩の反語（インタビュー）、『朝日ジャーナル』一三一

二四、朝日新聞社

福地曠昭、一九七二／七／二、沖繩の戦後は終わらない―県民にそっぽを向かれた調印、『朝日ジャーナル』一三一

二四、朝日新聞社

森崎和江、一九七二／八、沖繩・朝鮮・筑豊、『現代の眼』、現代評論社

森秀人、一九七二／八、沖繩怨歌・崩壊への出発、『現代の眼』、現代評論社

大城立裕 大野明男、一九七二／八、創造力の回復としての復帰、『現代の眼』、現代評論社

谷川健一、一九七二／八、琉球弧の解放とは何か、『現代の眼』、現代評論社

新里金福、一九七二／八、本土在住沖繩人の戦後、『現代の眼』、現代評論社

新崎盛暉、一九七二／八、沖繩の戦後史―帝国主義的再編と人民の抵抗史、『現代の眼』、現代評論社

霜多正次、一九七二／九、沖繩をめぐる最近の思想状況、『民主文学七〇』、日本民主主義文学同盟

仲地哲夫、一九七二／九、『第三の琉球処分』ということ、『文化評論』一一一、日本共産党

佐藤静夫、一九七二／九、思想問題としての沖繩―霜多正次論、『民主文学七十』、日本民主主義文学同盟

嶋津与志、一九七二／九、沖繩の渇きの夏 ルポルタージュ、『民主文学七〇』、日本民主主義文学同盟

西里喜行、一九七二／九、沖繩における「反復帰論」とその周辺、『民主文学七十』、日本民主主義文学同盟

安仁屋政昭、一九七二／九、沖繩戦の記録とその思想、『文化評論』一一一、日本共産党

津田孝、一九七二／九、沖繩問題と現代の作家、『文化評論』一一一、日本共産党

外間正四郎、一九七二／九、復帰をなぜ喜ばないか、『中央公論』、中央公論社

牧港篤三、一九七二／九、断章・沖繩的二ヒリズム、『中央公論』、中央公論社

琉球大学学生、一九七二／九、ぼくたちに祖国はない、『中央公論』、中央公論社

森秀人、一九七二、『沖縄怨歌・崩壊への出発―甘藷伐採期の思想』、現代思潮社

大田昌秀、一九七二、『拒絶する沖縄』、サイマル出版

吉原公一郎、一九七二／一、沖縄民衆の重層的意識 『反国家の兇区』書評、『中央公論』

喜屋武真榮、一九七二／一、沖縄を踏みにじるのは誰か、『中央公論』

川満信一、一九七二／一二、沖縄と日本の断層、『中央公論』

牧瀬恒二 山口啓二、一九七二／二、『日本史の再発見としての沖縄の歴史』をめぐって〈対談〉、『歴史評論』二五九、『歴史科学協議会 校倉書房』

松尾章一、一九七二／二、大里康永著『沖縄の自由民権運動』を読んで考えたこと、『歴史評論』二五九、『歴史科学協議会 校倉書房』

史科学協議会 校倉書房

中野好夫、一九七二／四、沖縄の果たして何が返るのか、『世界三一七』、岩波書店

飯島宗一、一九七二／五、沖縄における教育の課題と展望、『文部時報一一三九』、文部省大臣官房

大浜信泉 田中澄江 村山松雄、一九七二／五、沖縄の本土復帰をめぐる〈てい談〉、『文部時報一一三九』、文部省大臣官房

文部省大臣官房

源武雄、一九七二／五、復帰を迎える沖縄の心、『文部時報一一三九』、文部省大臣官房

吉本隆明、一九七二／五、家族・親族・共同体・国家―日本―南島―アジア視点からの考察、『知の岸辺へ』、弓立社

弓立社

中野好夫 松下圭一 などいなだ 伊東光晴、一九七二／六、沖縄のなかの日本の問題〈座談会〉、『婦人公論』

大田昌秀、一九七二／六、沖縄―憲法の虚像と実像の谷間で、『世界三一九』、岩波書店

高校生は沖縄復帰をどうみるか〈座談会〉、一九七二／六、『世界三一九』、岩波書店

川満信一、一九七二／六、民衆論、『中央公論』、中央公論社

上原生男、一九七二／六、『空道の思想』とは何か、『中央公論』、中央公論社

新川明、一九七二／六、現場の眼―ウチナーヤ、ニホンヤガヤ―、『展望』、筑摩書房

星野安三郎、一九七二／七、冲青同裁判「方言札」の侵略、『現代の眼』、現代評論社

喜多勝二、一九七二／七、冲縄の戦慄に誰が応えるのか、『現代の眼』、現代評論社

竹中芳、一九七二／七、逆説的差別論、『現代の眼』、現代評論社

金城朝夫、一九七三／七、新琉球処分の中の冲縄、『流動』

新里金福、一九七四／五、中村十作と謝花昇、『伝統と現代二七』

安仁屋政昭、一九七八／一〇、アメリカの冲縄占領と初期軍政、『日本史研究一九四』、日本史研究会

松田賀孝、一九七八／三、『自治と開発』の思想原理、『現代と思想三一』、青木書店

福木詮、一九七八／三、冲縄の社会と県政、『現代と思想三一』、青木書店

安良城盛昭、一九七八／九、冲縄の地域的特質、『現代と思想三三』、青木書店

金城正篤、一九七八、『琉球処分論』、冲縄タイムス社

遠山茂樹、一九七九／一、自由民権思想と現代、『世界三九八』、岩波書店

高沢皓司、一九七九／一一、第三次琉球処分と本土化の内実、『流動』

新崎盛暉、一九七九／八／七、戦後史における冲縄認識―欠けている主体・実践的課題、『エコノミスト五七―

三二』

安良城盛昭、一九八〇、『新・冲縄史論』、冲縄タイムス社

大江志乃夫、一九八二／四、西里喜行著『冲縄近代史研究』〈書評〉、『歴史評論三八四』、歴史科学協議会校

倉書房

川満信一、一九八六／一一／七、天皇と冲縄の現在、『朝日ジャーナル二八―四五』、朝日新聞社

吉本隆明、一九八九／七、南島論序説、『琉球弧の喚起力と南島論』、河出書房新社

安良城盛昭、一九八九、『天皇・天皇制・百姓・沖縄』、吉川弘文館

阿部統 宮城弘岩 アリフィン・ベイ 東江康治、一九九二／五、新しい時代の沖縄を考える、『沖縄問題研究

シリーズ二二五』、沖縄協会

大田昌秀 嘉陽田朝博 荒木健、一九九二／八、復帰二十年目の沖縄の課題（座談会）、『月刊自治研』

渡名喜明、一九九二、『ひと・もの・ことの沖縄文化論』、沖縄タイムス社

『新琉球史―近代・現代編』、一九九二、琉球新報社

山下重一、一九九三／三、沖縄の初期県政、『国学院法学三十巻四号』、国学院大学法学会